

クソ雑魚マンコだった  
千世子ちゃんがナンパ  
に引っ掛けかって芸能生  
命終了する話

七味胡椒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

千世子ちゃんがチャラいナンパに引っ掛かる訳がない

# 目次

クソ雑魚マンコだつた千世子ちゃんがナンパに引っ掛けつて芸能生活終了する話

2話

夜凧編1

夜凧編2

羅刹女編1

92 67 44 23 1



# クソ雑魚マンコだつた千世子ちゃんがナンパに引っ掛けつて芸能生活終了する話

事務所での仕事を終え、千世子は繁華街をぶらついていた。

特に目的があるわけではない。強いて言えば、そのうち景とのデート、もとい遊びにいく時の服やバッグを買おうかという程度。それも別に今日探さなければいけないというほどでもない、本当に暇潰しの散策だ。

道行く人々は千世子には気付かない。見つかれば一瞬で人だかりが出来てしまふだろう千世子はしつかりと変装している——キヤップにメガネ、それにマスクまで。それ違う人の中にはふと今横切つた白髪の少女につられて振り向く者もいるが、その頃には千世子の背中はもう遠ざかっている。凄い美少女だつた気がする、マスクでよく見えなかつたけど——とまた歩き出して終わり、が闇の山。

とはいって、目ざとい輩というのはいるもので。

「お……!? ちょ、キミ百城千世子じゃね？ え？ うわ、やっぱそーじやん！」

(…………はあ)

うんざり、という顔で千世子は向き直つた。

千世子より頭一つぶん半は大きな背丈。脱色された髪、耳に貫通したピアス、じやら  
じやらとうるさい装飾品。出来ればお近づきになりたくない類いの人種だ。

「あの……あまり騒がないで貰えます？」

「オフなので」

「お、ごめんごめん。いや、やっぱ本物はすげー美人だな！」

ずれたマスクをつけ直そうと外してしまったのが災いした。最悪のタイミングで最  
悪の相手に顔を見られてしまっていたのだ。

千世子はちらりと周りを見渡す。幸い、この男以外には見られてはいない。べらべら  
どうるきい男の言葉もどうでもいい立ち話と聞き流されているようだ。

ならば、さつさと話を打ち切るが吉。いつまでもこんな男の近くにいたくはない。き  
つい香水で鼻が曲がりそうだ。

「あー、すいません。それじゃこれで……」

「え、待つて待つて。サインくれない？　ってかちょっとお茶でもしていかね？　奢る  
からさ」

「結構です。では」

「は？　いや待つて待つて。そうだ、この前観なんだよ、『デスアイランド』。あれでさ、

ちよつと聞きたいコトがあんだけど聞いていい？」

「え……」

その言葉は意外だつた。見たところ男は映画なんて見るような感じではない、特に漫  
画の実写化なんて。

「聞きたいって、何です？」

「いや、オレあの漫画読んだ事あつてさ。でも映画に原作じやいなかつたキャラが出て  
るじやん。あのキャラの女優つてさ、次の売り出しのコかなんか？ ぶつちやけ千世子  
ちゃんより目を引かれたくらいでさ、気になつちゃつて」

「…………、ふうん」

ちらり——と千世子の瞳に火が灯る。

親友でありライバルであり、心の奥底ではそれ以上の感情を抱く相手。千世子から  
の、彼女——夜凪景への対抗心は並々ならぬものがある。

第三者、それも演技やら演出やらなんて全く分かつてなさそうな男。そんな相手に自  
分より景の方が——などと言われたら、その理由くらいは聞いておきたい千世子だつ  
た。

(まずい、かな…………まあ少しなら)

男がナンパ目的だなんて事は分かりきつている。けれどそんなのはしつかり突っぱ  
ねればいいだけの話。

千世子の視線の先には公園があつた。都会のなかの限られたスペースに整備されて

いる小さな公園だ。おあつらえ向きに内側を向いたベンチもある。もしこの男が無理やり迫つてきたりして人も通りの多い道がすぐそこで簡単に助けを呼べて、かつ外からは千世子の顔を見ることが出来ない。ほんの数分話を聞くだけなら丁度いい場所だろう。

「それじゃ、あそこでちよつとだけ。あ、貴方の質問に答えるから、私の質問も聞いてくれます？」

「お、もちろんもちろん。いや、百城千世子ちゃんと『デートする日が来るとはね』いや、デートじゃないから、何言つてんだコイツ——と内心毒づきながら、千世子はベンチへ向かつた。

A vertical column of nine diamond symbols, each consisting of a black diamond shape with a white outline.

結局。

千世子は、そのベンチに座る事さえなかつた。

「あ♥？ ああんつ♥？ やめてえつ♥？ ♥？」

安全を確認して、ただ話をするだけと決めて、場所も自ら指定して。そこまでしてから僅か1時間も経たないうちに、千世子は男にラブホへ連れ込まれ、正常位でパコられていた。

「千世子ちゃん、声デカすぎ～♪ 役者だからかあ？ 気持ち良さそうに腹から声出すの、イイね～」

「あつ♦？ あ、うつ♥？ あ、あ、～～つ♦？」

ぎしぎしと激しくベッドが軋む。

レッスン仕込みの肺活量で部屋に響くほどの喘ぎ声を迸らせる。と言つても、それは映画やCMでファンが耳にする美声とは似ても似つかない唾液が絡んで濁りきつたアクメ声だったが。

こんなナンパ師に惑わされるはずがないと思つていた千世子。

しかし、実際は男から見れば千世子は無防備な小鳥のようなものだつた。仕事付き合いで異性と関わることも多くあり男慣れしていると千世子自身思つていたのだが、実際は大違ひ。黒山や阿良也のように不躾であつても最低限千世子と一線を引いている仕事上の相手とは違う、ハナから身体目当ての男性。セックスはおろか男女交際もしたこのない千世子は男の手練手管に翻弄され、あれよあれよという間にベッドへ押し倒さ

れていたのだつた。

「いや～、それにしても千世子ちゃん、処女だつたんだね～。てつきり女優つて誰でも枕営業してるもんだと思つてたわ。ま、オレは処女でもしつかりアクメさせてやるから安心しろよ」

「ひうつ♥？ や、やめつ♥？」

無造作に千世子の胸を揉みながら言う男。その言葉通り、シーツには数滴、赤い零が落ちている。処女だつたのに加えて男は並外れた巨根、普通なら苦痛に咽ぶところだが、男の丹念な性技によつて千世子の膣肉はすつかりほぐれていた。最初はチンポを食い絞めていたマンコは今ではとろとろに濡れて迎え入れてゐるくらいだ。

「いや～、あの大スター、百城千世子の処女マン喰えるとはなあ。見かけたとき、運命だ！ つて思つたんだよね。こりや～ナンパするしかねえなつて、ぶはは！」

「あ♥？ あんツ♥？ あつ♥？ ぬつ、抜いてえ……！ ♥？ お腹、ぱんぱんでキツつ……？」

「え～？ 抜くわけないじyan。ていうか、千世子ちゃんも気持ちイイつしょ？ せつかくオレみたいな上手い男で卒業出来たんだしさ、楽しめつて」

「か、勝手な事——お、んツ♥？ お、う、ツ♥？ ♥？」

きつと睨み付けるが、軽く膣奥をほじられただけで敏感に反応し身体を仰け反らせて

しまう。適度に鍛えられた腹筋と背筋がしなり、美しいブリッジを描く。

外はまだ日が沈んでもいい。午前中はいつものように事務所へ行つて、午後はオフになつて。そして気が付けば初めて会つた男にホテルへ連れ込まれ、犯されている。

千世子の頭は焦燥と、それと興奮とで茹だりそだつた。そう、間違いなく千世子は興奮していた。オナニーもろくにした事のなかつた千世子が味わう初めての快楽。年頃らしく持つていた性交への興味。しかもそれは、女慣れしきつた男からもたらされる特上のもの。何よりキツマンを押し広げるデカチンポによつて、千世子は男の一挙手一投足で性感を覚えるようになつていた。

「あゝ、百城千世子の17歳処女マンコ、キツツ♪ やつぱ女優で身体作つてるからかね、締め付けえつぐいわゝ。でもオレにはこの穴狭すぎるからなあ、しつかり慣らしておかねーと」

「あ、ツ♥？♥？ ひいツ♥？♥？ やめでつ……ぐりゅんぐりゅんしないでえつ♥？」

♥？」

「いーからいーから。ま、オレに合うくらいまで緩んだら他の男と比べたときガバガバになつちやうだらうけどさ。他で満足出来なかつたらオレが相手してやるよ」

「嫌ああつ♥？ 広げちゃ駄目えええ♥？♥？」

もはや完全に勝利と掌握を確信している物言いだつた。実際、誰が見てももう千世子

はろくに抵抗出来ないと一目で分かるだろうが。

それでも千世子は懸命に目元を尖らせ、男に反抗する。

「くそっ、くそお……！ 訴えるつ！ ゼッたい警察に通報するから、おつ ♡ ? ♡ ?

「え？ そんな事して、捕まえられるに決まってるつ……！ んぐおうつ ♡ ? ♡ ?」  
「え？ そんな冷める事言わないでさ。千世子ちゃんも楽しんでるんだし、お互いセフレ関係でいいじゃん。溜まつたら呼び出してハメるって事でさ。それにほら、デキる事はないんだし」

「ぬふふ……と男がカリの辺りまでチンポを引き抜く。

露になつた竿には、薄緑色のゴムが被さつていた。ラブホ備え付けのコンドームだ。  
男のごん太チンポにはいささか物足りないサイズだったが、それでも避妊具の役割は果たすだろう。

「おつふ……？ そ、そんなのでつ……許されると思つたら大間違い……！ こんな  
のレイプと変わらないでしよう！ 早くつ、その粗末なモノを抜いてつ」  
「…………へえ？」

チンポが抜けていく感覚だけで甘イキしながらも千世子が気丈に言い放つ。

その言葉が瘤に障つたのか。目を細めた男が完全にチンポを抜いた。今まで膣を支配していたチンポが消えた事ですっぽりと空洞が生まれ、千世子のマンコが不満を叫

ぶ。本人はともかく、マンコはすっかり巨根チンポの虜になっていた。

（お腹キュンキュンする……なんで、こんなクズ男のモノなんかで……もつとちやんと拒まないといけないのにつ……）

千世子には今をときめく女優としての自覚、プライドがある。これまで異性に言い寄られた事など数え切れないほどだが、その全てを袖にしてきたのだ。

その、ファンの好意と期待を背負つて立つ自分がこんなナンパ師の良いようにされるなど許されない。処女を散らされたのはもう取り戻せないとしても、これ以上の好き勝手はさせられない。こういった手合いは下手に出れば出るほど付け上がる。しまいには身体だけでなく金銭やら何やらを要求してくるだろう事は千世子にも察しが付く。

それに、

（夜凪さん……。私は、彼女に顔向け出来ない女優になる訳には行かない……つ）

今や誰よりも特別な相手の事を思い出す。

自分が堕落すれば、彼女は悲しむだろう。泣くかもしれないし、怒るかもしれない。そして——嫌われるかも。

そうなる訳には行かない。そう思えば、身を奮い起たせる事が出来る。こんな男に負けている場合ではない。自分や彼女が目指すのはもつともつと高い役者としての頂。どうでもいい小石に躓いている暇はないのだ。

そうして、すう、と息を吸い込んだとき――

「え……っ？　あ、あああ……！？♥？♥？」

びたん――と下腹部に落ち着けられる勃起チンポ。

ゴムを外され、男性器本来の赤黒さ、凹凸、薦のように浮き出る血管……それらをひつくるめて立ち上る威圧感が、千世子の反発心を削いだ。

何より、その大きさ。膣口に根本を添えられたチンポの亀頭は優にヘソの上まで達している。

ゴム越しでも未知の快楽を叩き込んできたソレが、生で捩じ込まれ、あまつさえ中出しを決められでもしたら一体どれほど乱されてしまうのか。千世子の子宮は恐怖と期待でおののくように引き絞られた。

「おっしゃ。じゃ、千世子ちゃんをオレのチンポで説得といくかあ。ケーサツ呼ばれたらまたまんねーしな、ちやあんと千世子ちゃんにオレと付き合うメリットを理解して貰わねーと」

「つあ、あああ……！？　ま、待つて待つて！！　駄目つ、そんなの生で挿れたら駄目だから

！！　ぜつたい駄目よ、駄目駄目駄――」

「お、ツ♥？お、お、お、ツツ♥？♥？  
たイクツ♥？♥？イツグウ♥？♥？♥？」

生での初挿入から、ほんの十数分後。

千世子は、ゴム付きセツクスが可愛く思えるほどに激しく喘いでいた。

生チンポの感触は、千世子のプライドと自負を簡単に粉碎した。

最も敏感な粘膜をいきり勃つた肉棒で直接エグられる感覺が堪らない。これまで女優業に邁進する人生でこういった経験が全く無かつたのが災いした。肉襞を擦り上げられ、子宮口をチンポで殴られ、腰と腰がぶつかり合う。その原始的かつ暴力的な快感に千世子は完全に駄目にされてしまっていた。

「ぎやはは！ 千世子ちゃんすっげー間抜けな声出てんぞ。つーかチンポで突かれるたびにイッてね？ いやー、ファンも幻滅だろうなあ、憧れの透明感溢れる天使ちゃんがナンパされたチンポでアヘつてるとか♪」

「オ、オ、ツ♥？♥？ だつ、黙つ……オ、ヘエツ♥？♥？ やべでつ♥？♥？ 抜いて、コレ抜いでえつつ♥？♥？」

「コレ、じやわかんねえなあ。千世子ちゃんは何を抜いて欲しいのかな〜〜??」  
「ち、ちんぽつ♥？♥？ チンポ♥？♥？ チンポ抜いてくださいつ♥？♥？ 貴方の  
おつきなチンポ抜いてつ♥？♥？」

「へ〜。なんで抜いて欲しいワケ？ 千世子ちゃん気持ちよさそーだけどなあ？」

「き、気持ちいい、からつ♥？♥？ 気持ちいいから抜いて♥？♥？ 負けるつ♥？♥？」  
「おかしくなるからつ♥？♥？」

実質、チン敗けを認めながらのお願い。もう敗北確定だけれど、これ以上追い詰められては後戻り出来なくなるから——という千世子の断末魔。

勿論、男がそんな事を受け入れる訳はなかつた。想像以上にチンポに弱かつたとはいえ百城千世子は最高級の少女である事に変わりはない。女を抱くのなど慣れたものな男といえども千世子以上の女性と寝た事なんてないし、そんな彼女をあと少しチンポで子宮を虐めてやり中出しアクメを極めさせたらセフレ間違いなしという状況でみすみす手放す理由などどこにもなかつた。

「そつかそつか。オレのチンポに負けちやうか。負けるつてな、具体的にどんな？ オレに逆らえなくなつちやうか〜？」

「そつ、そんなんじやない…………♥？♥？ このチンポの事しか考えられなくなつちやう  
♥？♥？ 女優とか演技とかどうでも良くなる♥？♥？ 貴方の都合のいい便器にな  
りたくなつちやうつて言つてんの…………♥？♥？ だからこれ以上チンポで脅すの止め  
てつ♥？♥？ 私の人生、あと数回チンポで突いたら滅茶苦茶に出来るからつて本当に  
やつたら許さないからつ♥？♥？」

「……ほお」

本心から嫌がつてゐるのか、人生破滅アクメを間近にして頭がバグつてゐるのか。む  
しろ中出しを求めてゐるようにも聞こえる千世子の言葉。

口だけならいざ知らず、マンコさえもチンポをぬちゅぬちゅと頬張り、放す気配なん  
てない。降りきつた子宮口は亀頭にねつとりキスして『いま射精したら一滴残らず子宮  
で飲み干させて頂きます』とお伝えしている。

ある意味、女優以上の天職だつたかも知れない。どれだけ気丈に振る舞つても子宮を  
内側からブン殴られれば一発で腰を蕩かしてしまう激弱マンコの持ち主。それが百城  
千世子という美少女だつた。

「えつ——は、はああ……!? なんで、ビキビキつて……よけいチンポおつきくなつてつ  
……♥？♥？ どうして、こんなにお願いしてゐるのに♥？♥？ ちゃんと聞いてたのつ  
？ 貴方が射精したら私終わつちやうのよ!」

煌めく白髪を振り乱し食つて掛かる千世子。  
しかし、

「ちよつとつ!! ニヤニヤしてないで聞、お、ほツツ♥?♥?お、お、んツ!♥?♥?  
?」

「はいはい、うるせーぞつと♪」  
ゴツン、とピストンを食らわされただけでアクメし、また一歩完全敗北へ近付く千世  
子。

それだけではない。足首を掴まれ、柔らかい股関節を活かしてがばりと股を広げられ  
る。長い脚が往復の邪魔をしない体勢となつた。

そのまま、男は——がくがくがくつ!! と小刻みで激しいピストンを開始した。千世  
子の弱点である子宮を一番滅茶苦茶に攻撃できる、千世子殺しの鬼ピストンだ。

「——ひいいいつつ!! ♥?♥?お、お、お、つつ♥?♥?♥?」

男は重い一発よりも千世子に休む暇を与えないほうが効くと判断したのだろう。そ  
の目論見は的中していた。身体を揺するようなピストンでコンコンコンコンと子宮口  
を連續殴打され千世子が泡を吹く。

痙攣する千世子の身体からきらきらと汗が散る。チンポあと数回突かれたらなん  
て閾値は簡単に超えてしまつた。髪と同じく色素の薄い千世子の肌は興奮度合いを示

してピンク色に染まっていた。その肌の色も、ばくばく高鳴る心臓も、酩酊したような脳みそも、どんな稽古でも撮影でも感じた事はない。

処女を食い荒らされたのと同時のガチイキ生ハメセックスは千世子に二度と忘れられない経験を刻んでいた。この先いつ如何なる時も、この快楽は一瞬で思い出せる事だろう。

「千世子ちゃん、ベロチューしよーぜ。ほらほら、舌出せって」

「ふえあ、んむつ、んん〜〜つ♥?♥? やらあつ……むちゅ、れろおつ♥?♥?  
んええ〜〜つ♥?♥?」

がつちり顎を掴まれ口内まで蹂躪される。タバコ臭い唾液と千世子の甘い唾液が攪拌され混じり合っていく。

「れる、ぶちゅぶちゅぶちゅ……つ♥?♥? んぐ……こくつ♥? んんつ♥? やだつ、唾液飲んじやつたつ……♥?♥?」

「千世子ちゃんキス下手だな。もしかしなくとも、初めて？ いや、百城千世子のファーストキスまで貰つちまつたわ♪ 一生自慢に出来るだろコレ！」

「ふつ、ふざけるなつ……!! 言いふらしたら殺、あつ♥? あつあつあ♥?♥?」

「千世子ちゃんさあ、学習しよ？ ナマイキ言つたらチンポでオシオキされるつて分からん？ ほれ♪ ほれほれほれ♪」

「あつ♥？ おつ♥？ つおお♥？ ぐぐつつつ♥？ ♥？ やだ、やつ♥？ ♥？ もう嫌♥？ ♥？ イクの嫌あつ♥？ ♥？」

もはや、千世子は男のオモチャだつた。千世子の意地をかけた抵抗だつて男からすれば少しチンポで子宮を持ち上げてやればアヘ声と共に霧散するたわごとに過ぎない。むしろ適度に抵抗する事で百城千世子を自分のチンポで支配しているという実感を男に与える結果となつていた。

「そんじや、一発目行きますか♪ オレのは濃さも量もスゲーからな、覚悟しろよ♪  
オレの射精でアクメしなかつた女、いねーから♪」

「はつ、あ、え?? な、中でつ!? 冗談でしょ、ぜつたい駄目、駄目だからあつ!!」

「それさつきと同じじやん(笑) お、来る来る、上つて来るぞ。あ、ちなみにしばらく抜いてなくて、三日ぶん溜まつてつから。すげー濃いの出るから覚悟しとけや」

「嫌つ、嫌嫌嫌つ!!」

千世子の脳内を恐怖が埋め尽くした。汚される恐怖、妊娠するかもしれない恐怖——何より恐ろしいほどの快楽への恐怖。

いくら性技に長けていいるとはいえ、初対面の男を相手にしてあつさりよがり狂つてしまふクソ雑魚マンコ。

そこに濃厚白濁ザーメンを流し込まれたら一体どうなつてしまふのか、千世子自身に

も想像がつかない。

「暴れんなつて、オラツ!! マンコぶつ壊すぞ!!」

「ぐつオツ!! ♥? ♥? おブツ ♥? ♥? そつ、それホントにヤバつ……♥? ♥? ぬぶり——と、入つてはいけない神聖な場所に侵入された感覚。

緩みきつた子宮口を亀頭が抉じ開けたのだ。それでも必死に亀頭をぱくぱく咥えている子宮口が健気ですらある。

そして――

びゆるつ ♥? ♥? びゆるるるるつ ♥? ♥? ♥?

どぴゅくくつ ♥? どふどふどふ…… ♥? ♥? ♥?

「 ???」

ぽかん、と。何をされたのか、咄嗟に把握出来ないような千世子の顔。

しかし、ザーメンの熱さで子宮が焼け、粘つこい重さをずつしり飲み込むにつれ、背筋をアクメの電流が貫いていく。

「お、つ ♥? ♥? お、 ♥? ♥? お、 お、 お、 ♥? ♥? お、 お、 お、 ～ ♥? ♥? ？」

（終わつた ♥? ♥? 負けた ♥? ♥? 終わつちやつた ♥? ♥? ）

本能的に千世子は悟つた。自分は、この男に勝てなかつた。この敗北アクメを極めさ

せられた瞬間、女としての敗北を喫したのだと。

「あ、～、百城千世子のマンコに中出し、気持ちえ～～♪♪ ヤツベ、まだ出る♪ キンタマ空っぽになるまでゼーんぶ出したるからな～♪」

「つ♥？♥？ お、あ♥？♥？ あひつ♥？ ふあああ……♥？♥？」

「うわ、子宮吸い付いて来てら。さつきまで処女だつたくせにどんだけ淫乱だよ（笑）お望み通り子宮満タンにしてやらあな。あ、後でアフターピルやるからちゃんと飲んどけよ。まあ百城千世子を孕ませるつてのもアリだけどな♪」

「ほおおおおおおおおおお……♥？♥？♥？」

どぽどぼ、じょろじょろと小便さながらにぶちまけられるザーメン。その一滴一滴が千世子に敗北を自覚させ、同時に狂おしい快感を与えていく。

（もう……駄目……♥？ こんな快樂を知つてしまつたら……♥？）

出演作を成功させた時よりも、舞台で観客を魅了した時よりも。比べ物にならない幸福感。

この味を知つてしまつては、もはや以前の自分には戻れないと、千世子は悟った。



『ファンの皆さん。いつも応援してくれてありがとう。百城千世子です』

映像の中で、ベッドに正座した千世子が呼び掛けるように言つた。

白く輝く髪と肌。印象深い琥珀色の瞳。ファンが、いや今や大衆の大多数が知つてゐるだろう若手女優のトップ、数多のCMや映画に出演し、老若男女幅広く支持を集め  
る百城千世子の姿。

だが、完全にいつも通りとはいかない。

なんせ——今の千世子は、一糸まとわぬ全裸だつた。

『き、今日は……皆さんに、謝らなければいけません。皆さんは、私を若手トップの女優  
だつて……天使だなんて呼ぶ人もいますけど……』

顔を赤く茹だらせた千世子がカメラに近付く。

千世子の動きに合わせて、カメラが徐々に下を向く。カメラマンは、ベッドの脇に立つてゐるらしい。その腰元、股間の辺りに千世子がにじり寄つていつて——

『私、本当は…………このチンポに堕とされた……？』 セックス激弱の尻軽女なんで  
す…… ♥ ? ♥ ?

カメラが完全に下を向いて。

赤黒巨根チンポに、うつとり手を添えて頬擦りする天使の顔が映し出された。

『私、このチンポで滅茶苦茶にされて……♥？ 頑張つて抵抗したんですけど、ぜんぜん敵わなくて……都合の良いときに呼び出して性処理に使われるセフレ兼便器契約を結ばされてしまいました……♥？ ♥？ あ、ちなみに、彼とは今日初めて会いました♥？ ♥？ ナンパされて、警戒したんですけどまあ大丈夫か、なんて高を括つたら、あつさり喰われちゃいました♥？ ♥？』

言いながら、れろお〜つ……と舌を這わせる千世子。

れろれろ、ぴちやぴちやと小さな舌を伸ばして唾液を広げていく。ほどなくチンポは千世子の唾液で丸々包まれてしまつた。

『こつ、この動画は、記録映像です♥？ 私がこのチンポに負けたつていう記念撮影……♥？ そして、証拠映像でもあります♥？』

ぱっくり口を開けて、チンポを頬張る。

千世子の小さい口ではうまく咥えられない。それでも外れそうなくらい顎を開いて、どうにか呑み込む。

正座したままのノーハンドフェラで、グロテスクなチンポをぐつぽぐつぽと往復する。

『じゅるつ♥？ ♥？ ぐぶつ♥？ ブポツ♥？ ♥？ ずろろお〜ツ……♥？ ♥？ ♥？

ぶはつ、はあつ、はつ……♥？♥？』

ぼろん、と千世子の口から解放されたチンポ。当代最高人気のスターによる勃起お助けフェラを受けて、攻撃的なほどに張りと硬さを増している。

『彼との契約には、条件があつて……私が便器扱いを受け入れるうちは、女優を続けてもいいつて契約♥？♥？だからこの動画は、私がその契約を了承するつていう動画です♥？私が契約を破つたらネットにばらまいて破滅させられる証拠映像……♥？♥？』

ねちよねちよ、ずりすり。

人形のように整つた顔にチンポの裏筋が擦り付けられる。百城千世子の顔を使つた顔面コキ。数百万はくだらないファンを持つ美少女の顔面を好き勝手使う事に優越感を覚えているのか、チンポがびくびくと震え射精の準備を整えていく。

ベッドから降りた千世子が、今度は床で正座した。三つ指をつき、深々と頭を下げる。『お願ひします……♥？ぜつたい契約を破らないと誓います♥？どうかこの映像、ネットに流さないでください♥？お願ひします、お願ひします♥？♥？貴方のチンポに負けた哀れな女の子の芸能生命……貴方が握つてるんです♥？♥？便器にだつてなんだつてなりますから♥？♥？どうか、どうか♥？♥？私を女優でいさせてください……♥？♥？』

——どぴゅつ、びゅううつ。

ぼた、ぼた、ぼとつ。ぶちゅ、どろおおつ。

チンポから線を引くように、ザーメンが迸る。

手でチンポを掴み、角度を調整されたそれは、大部分が千世子の頭へ引っ掛けられていく。

輝く白髪の上に、髪の白よりも白濁し黄ばんだザーメンが乗っかり、染み込んでいく。  
びちびちと浴びせられ、垂らされたその糸が切れるまで、映像の中の千世子が土下座を崩す事はなかった。

## 2話

「あ——あれ、千世子ちゃんだ……!?」

「え、うわ、マジ……!? 天使じやん！」

本物初めて見た!!

送迎用のバンから路上に降り立つ美少女の姿に、通行人が沸き立つた。  
飾り気のないシックな白のワンピース、喉の乾燥を防ぐ為のマスク。そんな衣装でさえ、彼女——百城千世子の魅力は翳らない。どころか、『これはこれで』と思わせるような、衣装を自らに合わせさせるような輝きを持つている。

初めて彼女を見た者は、その白さと、纏う雰囲気に気圧される。まるで精巧な人形のような外見でありながら、全身に漲る生気に圧倒されるのだ。

パシャパシャ、カシャ——とスマホのカメラが彼女を捉える。最初数人が気付いただけだったのが、瞬く間に十人、二十人。彼女が視界にいるうちには他の物は見えないとばかりに、皆が千世子に注目していた。

スタッフやマネージャーを伴い、というより囮まれながら、ビルのエントランスへ向かっていく。関係者だけが入れるセキュリティドアの前まで来て、初めて千世子が観衆たちを振り返った。

——くい、とマスクを顎まで下ろし、微笑みながらひらりと手を振る。

それだけで観衆が一斉に沸く。

千世子がビルに消え、しばらく経つてからも声は止まない。

このほんの数分の出来事は、その場の全員が一生忘れられない記憶になり——そのうち何割かは、新しく千世子のファンになつた事だろう。



「んぶつ、じゅるるるつ♥？ ぶぷツ♥？」

「あー、イイ感じ。じゃ、もつと深く咥えてみな」

「（ダ）ぶつ……ぐぱふぱふ♥？ ♥？」

ファンに手を振つて、ビルに入つて、一人きりになつて——。

人目がなくなり、その足で待ち合わせ場所に向かつた千世子は、男のチンポをしゃぶつていた。

ビルの裏口は周りから死角になつていて、人の出入りもないためまず見付かる事はな

い。

それでも屋外でフエラチオに及んでいるという事で、千世子はしきりに周囲を気にしていた。突つ立つた男の足元でしゃがみ込みながら、ちらちらと視線をさ迷わせる。

「ほらほら、大丈夫だつて。それよか、マスクしたままのフエラつてのも意外とアリだなう。口が見えないの、逆にそそるわ」

「ぶちゅつ♥？じゅるるおツ♥？♥？」

「ずずつ♥？♥？」

髪をくしやりと撫でられて、観念したように千世子が視線を男に戻す。

蹲踞の姿勢で男の膝辺りに手を当て、ぶつぼぶつぼとチンポを吸う千世子。

口には変わらずマスクを着けたまま。マスクをめくり、竿に被せるようにして、口内へとチンポを導いていた。

亀頭と唇の結合部は白いマスクに隠れて見えない。それでも汁気をすする音、見え隠れする赤黒い肉棒、それに顎まで伝う唾液が口淫の激しさを物語つていた。

「フツ、フーッ♥？♥？れろれろれろ……♥？♥？れるお～～～つ♥？♥？」

鼻息荒くチンポに奉仕する千世子。

その表情は、眉根をひそめ時折男を上目遣いで睨み付ける嫌悪感に溢れたもの。ただし、それがそのまま千世子の心情を十割反映しているとは言い難い。顔は耳まで赤く染まり、汗が滲む額は千世子の興奮を表しているし――

「おつ。言いつけ通りノーパンで来たんだな、偉い偉い。つかもうマン汁垂れてんじやん、相変わらずスケベマゾだな」千世子は

「ん、ぐうう……♥？♥？」

呼び捨てにされた千世子は一層目を尖らせるが、男の言う通り股の間からは粘液が垂れ、アスファルトに染みを作っている。

男と奴隸契約を結んだ千世子は毎日のように呼び出され抱かれていた。男とのセックスは毎回千世子に未知の快楽を与え、心と身体を侵食した。

処女喪失セックスでさえイキ狂つてしまつた千世子は更に繰り返し調教を施される事でもはや完全に後戻り出来ない所まで墮ちきつていた。今では男の命令には完全服従し、呼び出されれば前準備のように勝手に股が濡れるくらいだつた。

「そんな睨むなつて、まあ目付き悪い千世子もカワイーけどさ。ほら、フェラ抜きに集中しろや」

「んぶツ……♥？♥？」

男が改めて命令すれば、千世子の敵意は一瞬で霧散してしまう。つり上がつていた眉は溶けるように垂れ下がり、視線もゆつくりと落ちてマスクの下で往復する幹へ。潤んだ瞳でチンポを見詰めながら、自分を屈服させた相手への奉仕に夢中になる。

「ちゅつ、ちゅつちゅつ♥？♥？ むふ、ちうくくつ♥？♥？」

薄い唇を尖らせてチンポに吸い付く。ぱんぱんに腫れ上がった亀頭は千世子の唇が焼けてしまいそうなほど熱い。マスクのせいで熱がこもり、千世子の頭を朦朧とさせていく。

「ぐぶ、むぐうううつ♥？♥？　ごぶつ♥？♥？　んぐううううう……♥？♥？」

顎を限界まで開き、チンポを喉奥へと導く。以前は咥えるのが精一杯だつた巨根も、今ではしつかり呑み込めるまでになつていた。

そのまま顔を前後に振り乱し唇でチンポをしげく。トレードマークの白髪がふわふわと揺れた。

「じゆる♥？♥？　ずずずつ♥？♥？　ぐぼ、ぐぼ♥？♥？　ずるるるる♥？♥？」

「そうそう、奥までな。……うわ、スッゲー顔♪　ファンが見たら気絶するわ、コレ(笑)」「ぢゆるるるつ♥？♥？♥？　ぶつちゅううう♥？♥？」

男がマスクを摘まんでめくると、フェラに熱中している千世子の口元が顎になつた。艶めいた唇がチomp的根本にぴっちり密着して咥え付き離さない。顔を引くのに引きずられて、千世子の口は下品に伸びていた。スッポンのように貪欲で下品なフェラ顔を晒しつつ、ザーメンを吸い上げようとする。

「ぎやはは、ケツサクな面してんな！千世子!!　よつしゃ、撮つておいてやるよ♪」「んっ!?　んんくくつ♥？♥？」

見下ろす男がスマホでパシャパシャと撮影する。千世子は必死に手をかざして目元を隠そうとするが、それが逆に彼女の淫靡さを増しているようでもあった。

「つし、そろそろ出すぞ。ほらちゃんと咥えて咥えて。手で隠すなや、口内射精される顔ちゃんと撮らせろ」

「ぶ。ぶツ。♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？」

「そうそう、カメラ目線で……お、キタキタつ、出る出るつ——」

「どぴゅつ。♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？♥？」  
「びゅ。ぶつ。♥？♥？♥？♥？」  
「ぶ。びゅ。ゆ。び。ゆ。つ。♥？♥？♥？♥？」  
「び。ゆ。る。う。」

「ぶ——ぐ、むぶうううう♥？♥？♥？♥？」

マスクの下でチンポが弾けた。

ビクツ！ ビクツ！ とマスクを持ち上げながら跳ねるチンポ。その一回ごとに、ゼリー状のザーメンが千世子の口へ打ち込まれる。千世子は懸命に飲み込むが追い付かず漏れたザーメンがマスクの裏側を汚していく、のみならず小さな鼻からもぶびつと白濁液を吹き出してしまった。

「あくくく最つ高♪♪ マンコも良いけど千世子の口はやっぱ格別だわくく♪ オレ専用のフェラ抜き穴になるよう仕込んだ甲斐があつたな〜♪」

「ごつぶ、ごおツ。♥？♥？♥？」  
「ごきゅツ。♥？♥？」  
「ゴクツ。♥？♥？」  
「ごツ。♥？♥？」

男は射精の快感に浸るが、大量のザーメンを流し込まれた千世子はたまつたものではない。喉を蠕動させ、多過ぎて窒息しかねない粘液を必死に呑み込んでいく。薄暗い路地裏でフランシュが焚かれる中、寄り目になり呼吸も忘れて千世子は全てを飲み下した。

「ぶツ…………はあーつ!!　はあーつ!!　はあつ、ゲホツ、けほつ……んぐえつ、ごぶつ  
♥?　……ごげえええツ　♥?　♥?」

「ぶはつ！　千世子お前なあ、たらふく飲んで盛大にゲツプして、下品にも程があんだろ  
(笑)　あ、今のちゃんと録画してたんによろしく♪」

「はつ！　はあつ!!　……く、そおつ……人でなし……!!」

吐き捨てる千世子。しかし、腕を掴んで引き立てられ、股間に指を差し込まれると一瞬で目元が蕩けてしまう。

「あつ、いやつ　♥?　♥?」

「んなこと言つてさう、千世子も濡れまくつてんじやん。ハメたいんだろ？　ん?」

「つ…………くう…………♥?　♥?」

男が指を広げると、ねつとりと愛液が糸を引いていた。見せ付けるように掲げられ、千世子が目をそらす。

「ん？　正直に言つてみ？　オレのチンポ、マンコにぶち込んで欲しいか？」

「…………♥？♥？は…………♥？♥？」

真っ赤で俯く千世子。いくらか逡巡してから、こくりと頷いた。

「オッケー、そう来なくちゃな♪ お前これから撮影だつけ？ それじゃあ千世子さあ、ちよつと金貸してくんね？ パチで暇潰ししてえけど軍資金なくつてさ～」

「んつ…………い、いくら欲しいの…………♥？」

「ん？ 千世子の気持ち程度でいいよ？」  
ぱか、と千世子が財布を開ける。

男は千世子に大金を寄越せとか、カードを持たせろと言う事はない。というか、他にも女がおり金には全く困っていない。千世子もそれは分かつている。

これはあくまで、千世子と男の関係をはつきりさせる行為。千世子に自分で金額を決めさせ、貢がせる。そうする事で、千世子が男に奉仕する間柄という事を再確認する。

そして、これは千世子にとつては悪くないシステムだつた。千世子は金など湯水のようを持つている。そこからいくらかの小遣いを差し出すだけで、男は他の女よりも自分を優先して抱いてくれるし、セックスにも気合いを入れてくれる。今の千世子としては決して損するばかりではない。勿論こんな金を払わざとも男が千世子という特上の美少女を後回しにする事などないのだが、それでも男の機嫌取りには最適だつた。

「じゃあ…………はい。大事に使つてよ…………」

「お、わりーな。……つうかさあ」

男はニヤリと笑つて、

「千世子さ、もしかしてオレ用の金用意してくれてる？ カード持つてんだもん、現金持つ必要ないよな？ この前カードで払つてたし」

「……？ 馬鹿じやない、そんな訳ないじやん……？」

怒りと屈辱でか、ふるふると震える千世子。それでも、その言葉はまさしく図星だつたが。

「んじや、また後でな。股濡らしてんの気付かれんなよ？ オナニーも禁止。しつかり我慢しどけ、気絶するまでハメ潰してやるから♪」

「……ん……？」

むにゅ、むにゅつ。

ワンピースの上から胸を無造作に揉まれながらの言葉に、すっかり従順に頷く千世子。

このあと千世子は、見学に来た景が驚くほど、見事な演技を披露したという。



「——うん。ごめんね夜凪さん。せつかく誘つてくれたんだから、行ければ良かつたんだけど」

『ううん、いいのいいの！ 千世子ちゃん忙しいものね、ぜんぜん大丈夫よ！』  
その日の夜、千世子は景と電話をしていた。

仕事の帰り、千世子は景から夕食でも一緒にどうかと誘われた。千世子は用事があると断つたのだが、後から景が電話を掛けて来たのだ。

「それで、どうかしたの？ 電話してきて」

『あつ……う、うん。そのお……』

尋ねられた景は答えにくそうだ。言葉に詰まり言いあぐねている。

(……もしかして)

「夜凪さん。まさか、と思うけど

『う……ううう！ ち、千世子ちゃん！ 今度の休み、デートしましょう！？』

『あ……もしかして、バレバレだつた？』

『うん、それはもう。……れろつ。そうじやないかと思つた』

「うん、それはもう。……れろつ。そうじやないかと思つた」

千世子と景。二人は付き合っている、という訳ではなかつたが、それに近い関係だつた。

デートも数回した事がある。大抵、千世子が誘う側だつたが、今回は珍しく景が声を掛けってきたのだ。

「珍しいじやん、夜凪さんから誘つてくれるなんて。勿論OKだよ」

『ほ、本当つ？ 良かつたあ……』

「だけど、どうしたの突然。ん、むう……なんだか切羽詰まつてゐみたいだつたし……ぶちゅつ」

『うん、その……んんつ？ 千世子ちゃん、さつきから何か変な音してないかしら？』

「あ、ごめん。ちょっとジュースを飲んでて」

舌を引っ込んで千世子は答えた。

『あ、そななんだ。それで、誘つた理由だけど……最近、千世子ちゃんと出掛けになつて。忙しいのは分かつてるけど、寂しくなつちやつて』

「……そつか。うん、嬉しいよ」

千世子にとつて景は特別な存在だ。偶然から出会つた親友であり、共に女優として競いあうライバルであり……そして好意を抱く存在でもある。そして、向こうも千世子に同じ想いを持つてくれているのも分かつていた。

(夜凪さん……)

彼女の笑顔を想うと、唇が綻ぶ。景の方から自分を誘ってくれた、という事に胸が暖かくなつた。

「それじや、次のオフでね。細かいことはまた今度でいい?」

『あ、うんつ。夜遅くにごめんなさい。またね、千世子ちゃん』

『ええ。楽しみにしてるわ、夜凪さん♥?』

『う……うん。おやすみなさい、千世子ちゃん……♡』

ぶつり——と通話が切れた。

千世子は、微笑みながらスマホを見詰めた。そこに映るホーム画面も景とのツーショット。以前デートで撮つたものである。

久しぶりの景とのデート、その約束に胸をときめかせていると——  
「へえ、千世子、夜凪景と仲良いんだ。デートとか、熱々じやん」

「……そんなんじやないから。ただの知り合い」

千世子の頭上で男が言つた。

千世子は——電話しながら、男のアナルを舐めしやぶつていた。足を開いた男の尻に顔をくつつけ、舌を尖らせてアナルをほじる。千世子の舌の感触でバキバキに勃起したチンポをしこしこと擦りながら、空いた方の手でスマホを持っていた。

「そうなん？ そうは聞こえなかつたけどな～？」

「それより……どういうつもり？ 夜凪さんとの電話中に、ア、アナ……お尻を舐める、とか。ばれたらどうするのよ」

「はは、わりいわりい。でも千世子も興奮しただろ？ マンコびつちやびちやで太ももベタベタじやん。ま、昼から焦らされてたんだから、オナホの千世子が我慢出来ないのも仕方ねーか」

「…………」

千世子は何も言わない。怒つた——のではなく、男の言葉が正しかつたからだ。下手に反論しても痛い目を見るだけだと分かつてるので、黙るほかなかつた。

二人は、都内の某高級ホテルにいた。

一泊二桁万円するスイートルーム。もちろん千世子の奢りだ。セレブ御用達のホテルでセキュリティや守秘義務もしつかりしており、完全予約制でスタッフと顔を合わさずとも部屋に泊まれるためよく利用していた。

借りる部屋は必ず最上階、大きなガラス窓からは夜景が一望出来る。街を見下ろしながらオフパコセックスを楽しむのが、男の——そして千世子も——お気に入りだつた。「いや／＼しかし、絶景だね～。千世子のおかげでこんなトコに泊まれんだから、感謝しねーとな。そうだ、なんかやつて欲しい事とかある？ 何でも聞いちやうよ？」

「別に……特にないけど」

「ホントか？ なんかあるだろ？」

「…………」

（見抜かれてる……♥？）

痛いくらいに疼く子宮を押さえる。

昼間の路地裏マスクのフェラで既に発情スイッチの入っていたマンコはもう限界寸前。景の前で演技していた時などいつ愛液が滴るか気が気でなかつたくらいだ。

「……じゃ、じゃあ」

「んー？」

「貴方のチンポで……私のおまんこ、いっぱいぬぼぬぼして」

「うん、うん」

「奥まで突いて……子宮、ゴリゴリつてして……♥？」

「うん」

「いっぱいいいっぱい……中出しして欲しい……♥？♥？」

「——よおし。百城千世子にそう言われたんじゃあ、聞かない訳にはいかねーよな♪」

「あ…………♥？」

ぐい、と男が千世子を押し倒す。

快樂を前に鼓動を慌ただしくさせる千世子。  
しかし、

「あ、そーだ。今度さあ、オレにも夜凧景を紹介してくれよ。あの娘ともお近づきになりてーんだよねー、オレ♪」

「——は？」

男のその言葉で、一瞬にして興奮が冷めた。  
すう、と血の気が引く。

千世子の心中を危機感と嫌悪感が支配する。

「なに言ってんの？ 有り得ないから。死んで」

「え、ちょ。なんでそんな突然キレてんの？ なんかヘンなこと言つた？」

「言つた。ふざけないで。夜凧さんには手出しさせないから。……はあ、もういいや。  
冷めた。今日は帰るから。先にシャワー浴びてくる」

ぎし、と身体を起こす千世子。

夜凧に手を出す、という男の言葉は千世子の逆鱗に触れた。

自分自身は男のセフレに堕ちてしまつた千世子だが、それとこれとは話が別だ。夜凧には指一本触れさせない。例え自分が犠牲になつてでも、彼女の事は必ず守つてみせる  
と千世子は決心していた。

男の手を振りほどき、そのまま立ち上がりろうとする。と、肩を掴まれた。

「ちよつと、本当に今日はもういいって。シャワーもやめた。お金置いておくからもう帰る」

「いやあ、そりや困るなあ。つーかさ、千世子、お前ちよつと勘違いしてね？」

「はあ？ 勘違いって、何の話——」



「————お、ツ♥？　お、お、お、ゞゞツツ♥？♥？　ゆるしてつ♥？♥？　ゆるし  
へえゞゞツ♥？♥？」  
ばつちゅん、どつちゅん——と。

ベッドに突つ伏した千世子は、尻を高々と掲げたまま、バックから突かれていた。

シーツは洪水のように溢れた千世子の愛液でぐしょぐしょ。白く泡立った本気汁がひつきりなしに垂れ流されていた。

「ダメだね、許さね」。今回はマジで失神するまでブチ犯してやるから覚悟しろや」

「ひいいつ♥？♥？ごめ、こ、め、んなさいつ♥？♥？ごべんなざいいうつ♥？♥？」

「まだまだ、謝罪に誠意が足りねーなあ。オラア!!」  
「ひぎやつ！？ひぎいうつ♥？♥？」

ばつちいいん、と男が平手で千世子の尻を張る。小振りながらも形の良い千世子の尻たぶはもう真っ赤だ。

膨れ上がったチンポに膣肉を抉られ、千世子が悶絶する。

もう何回達したか千世子にも分からない。少なくとも尻を叩かれた時は毎回マゾイキしているのは確かだつた。

犬のような格好での交尾は、男との上下関係を改めて千世子に刻み込んでいた。景にに関しては譲らない、という覚悟はただの思い上がりだつたと改めさせるほどに。

「千世子さあ、忘れてねえか？お前はオレの奴隸で便器だよなあ??なに夜凪さんには手を出すなどか、冷めたから帰るとかアホなこと言つちゃつてるワケ??」

「かつ、勘違いしてましたあつ♥？♥？生意気言つて御免なさいつ♥？♥？オナホの分際で身勝手なこと言つてすいませんつ♥？♥？許してくださいつ♥？♥？」

「いや、許さないから。んく、千世子のケツは叩きやすくていいな〜」  
「いぎゅう〜〜つつ♥？♥？お尻叩かないでえつ♥？♥？ビンタでアクメするの

嫌あ～つ♥？♥？♥？」

再び男が平手を振り下ろし、千世子が強制マゾアクメに叩き落とされる。  
千世子の心はすっかり折れて、男に楯突く気など完全に消え失せていた。僅かに薄れていた男への屈服感が完全復活する。ばかりか、それは以前よりも大きくなっていた。景という特別な存在を守る意思さえチンポに突き崩された事で、もう男との上下関係は修正不可能なものへとなつていた。

「千世子、もう生意気言わねーか？ 夜凪景ちゃん、オレに紹介してくれるか？ いい返事をくれたら許してやるかも知れねーゼ？」

「は、はひつ♥？♥？ しますします♥？♥？ 夜凪さん、貴方のセフレに推薦しますつ♥？♥？ 夜凪さんも女の子ですから♥？♥？ 貴方なら一発でオナホに堕とせますつ♥？♥？」

「ぶつ——はははは!! おいおい、そこまで言つてねえっての!! つか、お前らレズカツプルなんだろ？ 男のオレに手え出されていいんか～～？」

「よ、喜んでえつ♥？♥？ 夜凪さんといつしょにご奉仕させてください♥？♥？ 生意気にレズカツプルなんて氣取つてた女優二人とも♥？♥？ 貴方のチンポで躊躇てください♥？♥？♥？ チンポで潰してください～～♥？♥？♥？」

唾を飛び散らしながら千世子が絶叫した。

千世子の言つたことは、決して口から出任せではなかつた。これほど気持ち良くて、理性を吹つ飛ばされるような快楽を一人占めする訳にはいかない。大切な存在である夜凪にもぜひ教えてあげなければならぬと、本心から思つていた。

「よーし、良く言えたなあ。でもまあ、今回はしつかりお仕置きだ。出すぞ、マンコ締めとけ！」

「ひつ♥？♥？あ♥？♥？」

男が宣言すると、千世子が迎え腰でぐりぐりとマンコをチンポに押し付けた。少しでも奥で、少しでも気持ち良くなれて射精して貰おうというオナホとしての反射的なご奉仕だ。

——ぶびゆるるるるるるつ♥？♥？どぴゆるる♥？♥？びゅぶうくくくつ♥？♥？♥？

「おー、出る出る。おら、ちゃんとケツ動かせや。もう使つてやらねーぞ、勘違いメスブタオナホがよお」

「おつ♥？ほつ♥？ほ♥？ほ♥？ほあ♥？♥？」

へこつ、へこつ、と千世子が腰を前後させる。腰と腰がぶつかるたびにペチペチ、ぶちゅぶちゅと水音がした。膣口を締め、腰を前後する事で全自动肉オナホの役割を果たし、男の精液をキンタマに溜まつたものだけでなくチンポに残つたものまで搾り出そうとしているのだ。

(イツツク♥？♥？ すごつ♥？♥？ チンポすご♥？♥？ 気持ち良いつ♥？ 夜凪さん♥？♥？ チンポ気持ち良いよおつ♥？♥？ 早くこっち来なよお♥？♥？♥？) 朦朧と思考する千世子。その脳裏を、強すぎる刺激が貫いた。

——ばしいいん!!

「うあ、っ!? あ、あ、あ、くくつ?? ♥？♥？♥？」

「言つたよなあ、お仕置きだつて。おらよ、つと！」

!?!\$\$\_♪♀♥？♥？♥？♥？」

まるで太鼓の玩具か何かのように左右交互に張られまくる尻。

激しいアクメで敏感になつた身体を手酷く扱われ、感覚神経と快楽物質、が許容量を超えたとき、千世子の意識はぶつづりと切れた。



「へ、二人でデイ○二ーランド行つたんだ。お、こつちはユニ○。楽しかつた〜?」  
「はつ……はい……♥？ 好きな女の子とですから……楽しかつたです……♥？」

「ま、そーだよなあ。しつかし、千世子は当然だけど夜凧景ちゃんもスグー美人だなあ……でも何か、服のセンスは変じやね？」

「そつ、そんな所も……可愛いっていうか……♥？」

千世子のスマホ、写真フォルダをスライドさせ、中身を見る男に千世子は答えた。

その身体はぶるぶると震えている。

今、千世子は土下座していた。男に対する反省のポーズである。だけでなく、その上には男が腰掛けていた。その体勢で、スマホの中の個人情報をすべて明け渡しているのだった。

時折、ぶびつ、ぼびゆ、と下品な音と共に膣口から白濁液が漏れる。子宮はおろか膣道が埋まるまでザーメンを注がれ、その上で体重を支えているのだ。千世子も必死に堪えているのだが、緩んだマンコからお漏らししてしまうのは無理もない事だった。

「よっしゃ。じゃ、今度のデート、オレもお邪魔させて貰うわ（笑）いいよな～千世子。何か意見ある？」

「い、いえ……名案だと思います♥？♥？ 楽しみです、すゞく……♥？♥？」

パチパチと脳内をアクメでショートさせながら千世子が答える。ぶびゆびゆ、とまたマンコからザーメンが吹き出した。

# 夜凪編1

「わーっ！ 千世子ちゃんありがとう～！ すぐ嬉しい！」

「あは、良かつた」

——一人揃つての、久々のオフ。

千世子と景は、渋谷へデートに来ていた。

UFOキヤツチャバーの景品を取つた千世子に景が歓声を贈る。

まずはショッピングをして、二人で『羅刹女』特集の雑誌を読んで、雑貨屋を冷やかして。そのあと二人は、以前『銀河鉄道の夜』の役作りをしていた頃にしたデートでも来たゲームセンターで遊んでいた。

景の腕の中には小さなぬいぐるみがある。あの時と同じように、また千世子が景に取つてくれたのだ。

「か、可愛いつ……！ ね、見て見て千世子ちゃんつ。このとぼけた顔がたまんないわよね!!」

「うーん。相変わらず夜凪さんは独特なセンスだね」  
目を輝かせる景に千世子がしつと言う。

一見、その様子は以前のデートと変わりないようと思える。訪れた場所も、キャップやメガネを用いた二人の変装もそつくりだ。

しかし、決して全く同一という訳ではなかつた。二人の距離はある時より近く肩がくつつき会う程だし、時折視線が合つてはくすぐつたく微笑み合つているし、なにより

|、

「ん……夜凪さんの手のひら、あつたかいね♥？」

「う、うう。ちょっと恥ずかしい……♡」

ぎゅ、と。指と指が絡まるように、お互いの手を握つていた。

千世子と景は、ただ仲の良い親友というだけではない。先日の『羅刹女』のように競い合うライバルでもある。外見も性格も、演技の手法も真逆だ。

しかし、それがむしろ二人の距離を近くしていた。お互いをさらけ出ししぶつかつた事で、逆に誰も間に挟まれないような距離感を形成するようになつていた。

「そこ、それより。やっぱりこのクレープ、美味しいわねつ。ちょっと生クリーム多すぎかな？」つて思うけどっ」

慌てて話を変えようとする景に、千世子がくすりと笑つた。

景を覗き込むようにして、

「へえ？ そつちの味はどんな感じなんだろ。夜凪さん、一口貰つていい？」

「あ、も、勿論よ千世子ちゃん。どうぞっ」

「ん？？」

「え。な、何？」

手元にクレープを差し出しても、千世子は受け取ろうとしない。悪戯っぽい表情で景を見た。

「何、じゃないよ夜凧さん。他人行儀で傷付いちやうんだけど。ほら、ちゃんと夜凧さんが食べさせて？」

「えつ……ええ！ わ、分かった……」

目を閉じて小さな唇を開く千世子。

景の手が震えてしまう。心臓をどきどきさせながら、クレープの先を千世子の口元へと差し出した。

「ん……むぐつ。……ん、あまあい♥？ 私はこれくらい甘い方が好きかも。残念、夜凧さんとは気が合わないのかな？」

「そ、そんな事つ！？ ジ、実は私もこのくらいの方がつ」

「ふつ……冗談だつて。慌てる夜凧さんも可愛い♥？」

「も、もお～つ……」

からかい混じりの笑みに景の頬が熱くなってしまう。

千世子はこうして景をからかう事がよくあつた。

とはいえ、景からすれば困りつつも嬉しい事だつた。心を開いてくれている証だと思うし、そもそも千世子がこんな事をするのは景に対してもうけである。これが千世子なりの愛情表現なのだと理解すれば、嬉しくなりこそすれ嫌な気分になるはずがなかつた。

「……あ。夜凪さん、唇にクレープついてるよ」

「え？ どこ？ ……取れた？」

「ううん、まだ。唇の端っこ」

ぺろ、と唇を舐めてみるもまだ取れていないようだ。

指で拭おうとすると、千世子に止められてしまつた。

「ダメダメ、夜凪さん。指が汚れちゃうよ。私が取つてあげる」

「え。でも千世子ちゃんの指も汚れちゃうんじゃ」

「ま、そうだね。だから」

千世子がむぎゅう、と景の顔を手のひらで挟んだ。

そのままゆつくりと顔を近付けてくる。いつの間にか真っ赤に染まつていたその顔

を見て、ようやく景も千世子が何をするつもりなのか気付いた。

(え……嘘、嘘つ、ここで……!?)

千世子の唇が近付いてくる。まだ他人に触れた経験のない、まつさらな景の唇に。

顔を掴まれて逃げられない。いや、逃げようという気も起こらない。突然とはいえ好きな女の子に唇を迫られて、つっぱねる選択肢は景の中にはなかつた。

吸い寄せられる唇と唇。相手の吐息を感じられるくらいになつて、ついに触れなつた、その時――

――ヴーツ、ヴーツ、ヴーツ――

「…………、あ……」

「ち…………千世子ちゃん、電話…………」

ポケツトに入つていた千世子のスマホが震えた。

雰囲気が霧散して、二人の唇が離れる。

電話がかかつてきただよ。スマホを確認して、千世子の身体が固まつた。画面を凝視しつつ絞り出すように言う。

「…………夜凪さん、ごめん。ちょっと外すね」

「あ、うん。いつてらっしやい」

(…………仕事かしら?)

それにしては、様子がおかしかつたけれど。

そう思いつつ、景は千世子を見送つた。

「夜凪さんお待たせ。こんな時に御免ね」

「ううん、だいじょうぶ。どうかしたの？」

「仕事の話。大した事じゃないよ」

10分ほどして千世子は帰つてきた。

心配だった景はほつとする。と、

「ん、ツ……」

「千世子ちゃん？」

「な、なんでもないの。行こう？」

何故だかごしごしと唇を拭つている千世子。

よく見れば、胸元にはいくつか新しい染みがある。

途中で飲み物でも飲んできたのかも知れないと、景は思った。



その辺りから、景は千世子の異変に気付き始めた。

様子がおかしかつたり、言い訳をしつつ何度も景から離れるのだ。

『つ……く、ふつ……♥？ ちよつと、バレるつ……♥？ こんな所で……弄るなつ……♥？』

『ん……千世子ちゃん？ 何か言つた？』

『う、ううん。何でもないよ夜凧さん……♥？』

——隣同士で座つた映画館では、何やらしきりにモゾモゾしていたり。

『んづ、パスタ美味しかつた！ お昼にイタリアンも良いわねつ。ね、千世子ちゃん！』

『ん……そう、だね……』

『…………??』

——しきりにスマホを気にしていたり。

『千世子ちゃん……本当にだいじょうぶ？ 体調悪いなら』

『へ、平氣平氣つ。ぜんぜん問題ないよ……♥？』

——何度もトイレに行つて、帰つてきたと思つたら、汗だくでスカートの裾を押さえていたり——。

確かに言う通り、体調が悪いという感じではない。呼び出しも仕事というなら仕方な

い事だ。

ただ気になるのは、千世子の表情。スマホが鳴った時は、辛そうな……助けを求めるかのような顔をするのに、いざ席を外して帰ってきた千世子は、頬を赤らめてどこか充たされたような様子なのだ。

(……おかしい。もしかして)

浮気でも——しているのではないだろうか。

別に、正式な恋人という訳でもないのに景は千世子を疑つてしまつた。  
(でも、そんなはずない……よね?)

はつきり交際しているのではないのだから、誰と付き合おうと千世子の勝手なのだが……それでも実質的には相思相愛の間柄だ。お互い以外と交際するなど有り得ないと景は思つた。

「……よし。確かめてみよう」

今度千世子が呼び出される事があつたら、少し尾けて盗み聞きしてみよう。

本当に仕事の呼び出しならそれでよし。安心して千世子とのデートに専念出来る。

その後——ス〇バで一息ついている時、また千世子のスマホに電話が掛かつてきたり。しきりに謝る千世子にいいよいよと笑いつつ、景は後を尾けてみたのだが——

「ん……あつ♥？は、早く済ませて♥？」夜凪さん……怪しんでるみたい……♥？」

「おー、分かつてる分かつてる。いいからもうひとつマンコ使わせろつて♪」

「ふつ  
♥?  
んんツ  
……  
♥?  
」

(う……嘘。嘘嘘嘘つつ……)!!?

景は、信じられない光景を目撃していた。

景と千世子がス○バでくつろいでいる、『呼び出し』があつた。景はそれに応じた千世子を尾行して行つたのだが、電話なら少し離れてすればそれで良いものを千世子は道を外れ、何処かへ歩いていく。

しばらく歩いて、人通りのない裏路地の物陰に着いた千世子は——

うつ……あんツ♥？き 今田何回目よつ……底無し ヘンタイつ……♥？】

「お、ツ♥？♥？ひつ、深つ♥？♥？」

——スカートをペロリとめくり、ショーツをずらしただけの格好で、バックから突かれているのだつた。

ゴムも着けず、ガラの悪い男に立ちバックで突かれる千世子。

それはセックスというより、正に『便器』。

脱衣すらろくにせず、ただ男のチンポを扱かせるための穴として扱われている日本若手トップ女優がそこにいた。

(嘘……でしょおお……!? なにこれ、なにコレっ……!?)

ぎゅうううつ……と景の心臓が痛む。

千世子は、変装を外してもいい。深めのバスクバレー、ハーフリムのメガネ。マスクは外しているが、ほぼ景とのデート中と同じ服装。

それでなくとも、景が千世子を見間違えるはずはないし——むしろ、余計に景とのデートと地続きの行為なのだと突き付けてくる。

「夜凪ちゃんとのデート、楽しそうだな♪ お前が惚れるのも分かるよ、夜凪ちゃんカワイイもん。ちなみに、夜凪ちゃんのどこが好き？？」

「んつ、くつ、♥？ ど、どこつて……♥？」

桃尻に腰を叩き付けられながら、景について聞かれる千世子。  
壁に腕をついて身体を支えつつ、

「よ、夜凪さんは……変わった、子でつ♥？ 最初は、よく分からなかつたの♥？ でも  
 ……一緒にいるうちに、中身はツ♥？ ジ、純粹で、可愛い女の子だつて、分かつて♥  
 ？ それでいつの間にか、す、好きに、好き、すつ、すきいいいくツツ♥？ ♥？ お  
 、ほツ♥？ ♥？」

「え？ 夜凪ちゃんが好きなのかオレのチンポが好きなのかよく分からんかつたけど  
 （笑）

「お……おお～ツ……♥？ ♥？」

（ち……千世子ちゃん……）

千世子からの自分に対する想いを知れた事と、そんな千世子がパコられているという  
 ギヤップで頭がくらくらしてしまふ。

今日の千世子の様子を思い出す。

恐らくは——あの『呼び出し』、その全てがあの男からのものだつたのだろう。帰つて  
 きた千世子がどこか妙だつたり、汗ばんでいたりしたのも今なら分かる。こんな行為に  
 及んでいたのならとても平静ではいられない。

けれど、景の心を削つていたのはそこではなかつた。千世子が自分とのデート中に抜  
 け出し、男と密会していたという事実もショックだが、何よりも——  
 （千世子ちゃん、なんで……そんなに気持ち良さそうなの……？）

腰をがつちり掴まれ、チンポを出し入れされている千世子。

しかし、その表情は快樂一色。寄り目になつて、舌を突き出して。ピストンに合わせて湿り気を帯びた喘ぎ声を上げる千世子は、メスの幸せに満ち溢れているとしか言い様がなかつた。

「ぱんつ♥？　ぱんつ♥？　ぱんつ♥？」

「はツ♥？　あうつ♥？　は、早くつ♥？　そろそろ誤魔化し切れないからつ♥？　夜凪さん、ぜつたい怪しんでた……♥？」

「なんだよ、そんなにはよオレのザーメン欲しいんか？　ま、千世子に頼まれたら仕方ねえな！」

「違う、そんなんじやつ♥？　あつ、チンポ……膨らんで……♥？　♥？」

そうして、腰と腰が密着して。夜凪の視線の先で、男と千世子の身体が震えた。  
(え、嘘……な、中に……出して……?)

びく、びくつ、と跳ねる二人の身体。腰がくつついでいて景からは分からぬが、射精したのだろう事ははつきり分かる。

「おツおツ♥？　♥？　チンポやつば♥？　♥？　勃起し過ぎつ……♥？　♥？」

「あく、ワリイ。イチャイチャしてるお前ら思い出したら、すつげー勃つわ(笑)ほい、最後まで出すぞ♪」

「し、死ねつ、死ね死ね死ね♥？♥？ 女の子……チンポで苛めて♥？♥？ 気持ち良くなつてるヘンタイ……♥？♥？」

「えく？ 人聞きの悪い。それでアクメしてる雑魚マンはどこの誰よ（笑）」「うつ、うるさいつ♥？♥？ 雜魚マン言うなつ♥？♥？ 私は悪くないつ、私は……あなたのチンポが強いのがぜんぶ悪い……♥？♥？」

（千世子ちゃん……凄い顔してる……）

ガツン、と頭を殴られたような衝撃。

減らず口を叩いても、どう見たってチンポに完敗済みの千世子。チンポで腹を耕され、雑魚メス丸出しでアヘる親友を見て景の理性にヒビが入る。

今まで——異性に恋した事も、興味を持つた事もなかつた。家族を捨てた父親の事があるからだろうか。何にせよ、無意識に男性をそういう対象から外していた所があつた。

けれど、親友の醜態を見て、初めて景は異性に——いや、あの男に魅入られてしまつた。

あの百城千世子。孤高で、誇り高くて、景と女の子同士の関係を築いていた少女——。それをあんなメスに堕とすなんて、一体どんな男で。

あの男とのセックスは、一体どれほど気持ち良いんだろう……と。

(なに、あの長いの……千世子ちゃん、あんなのお腹に挿れてたの……?)

射精が終わり、するすると千世子の股から引き抜かれるチンポ。

悠々と膣を満腹にするだろう長大さから目が離せない。竿に絡み付いた白濁液がぬらりと光るのが、生々しい肉の交わりを景に実感させた。

(う、わ……濡れてる……つ)

ひんやりした感覚で確かめてみれば、とつくに景のショーツは濡れそぼっていた。目の前のセックスで目覚めてしまつたマンコが愛液を分泌している。子宮はきゅんきゅん疼いて切ないほど。

(は……つ、あ……)

恐る恐る指を伸ばす。

景は性欲の薄い方で、オナニーはほとんどした事がなかつた。それも今ではただきつかけがなかつただけと分かる。

腰には、少し触れれば爆発してしまいそうな快感の塊がある。  
それでも触らずにはいられない。

スカートの衿から手を差し込み、秘所に指を触れると――

「くくくううううんつ??」

あまりの快感に思わず声を漏らしてしまい、口を押さえてばつと隠れる景。

しかし、一瞬声に反応した二人が振り返る方が早かつた気がする。

(お……おぞい、まざいまざい……!?)

ここにいては間違いなく見つかってしまう。

そう思つた景は、急いで裏路地を後にした。

◀◀◀◀◀◀◀◀

「おーっす！ 初めまして、夜凪ちゃん！」

「はつ、はひ……はじめまして……??」

案の定、というか

景が盗み見ていたのは、当然のようにバレていた。驚いた事に、男は普通に千世子と一緒に戻ってきた。

——俯く千世子の肩を抱きながら。

「いや、さつきは悪いね。今回は直接邪魔する気はなかつたんだけどさ、アレ見られちゃもう隠してもしようがないっしょ??」

「は……はあ。 そうですね……」

ス○バのオープンテラス席。 賑わいから少し外れた席に景は座っていた。

そこに男と千世子も腰を下ろす。 景と千世子で、 男を挟むようにして。

「千世子、 説明してやれよ。 オレとの関係。 ……千世子？ なに、 まだトんでもんのお

前」

むにい、 と男が千世子の顎をひつつかむ。

持ち上げられた千世子の顔は、 とろりと溶けてまだアクメの余韻から帰つて来れない顔だつた。

「ふえ……夜凧、 しゃん……？ あ、 やだ、 見ないで……」

「いやいや今さらナニ言つてんの。 ゼくんぶ見られたんだつての、 目え覚ませ！」

「んうつ♥？ あ、 ひつ♥？」

人目から外れているのを良いことに、 回した腕を首もとから突つ込んで千世子の胸を揉みしだく。 手のひらの動きに合わせて千世子がびくびくと痙攣した。

「ち、 千世子ちゃん……」

「わかつた、 夜凧ちゃん？ まあこんな感じ。 千世子、 今日夜凧ちゃんとのデート抜け出してオレに何回アクメさせられたか言つてみ？ ちゃんと数えるよう躊躇つてやつたよな？」

「…………。じ、じゅうきゅうかい……」

「あ、嘘付いた。たつた今イツたろ」

「は……ほんと、しね……？…………にじゅつかい……です……♥？」

観念したように言う千世子。

口では楯突きながらも、男の腕にすりすり頬擦りしている様子は、完全に調教されたメス犬でしかなかつた。

「千世子とはね、オレが声かけて仲良くなつたんだわ。最初は上手くいかなかつたんだけどさ？　お互いステップを踏んで、少しずつって言うか？　ま、そんな感じ（笑）な

「千世子♪」

「…………♥？」

「こくん、と頷く千世子。まだ男の手のひらはくりくと千世子の乳首を弄つていた。

「つ…………♥」

そんな屈服しきつた親友の姿を見て、景が腰をひくつかせる。

二人の雰囲気に当てられてしまい、もうショーツはびつちやびちや。いま立ち上がりば、椅子と股間の間に糸を引いてしまいかねない。

景は、身体の反応を受け止め切れていた。生来性欲が薄い上に兄妹たちの世話もあり、オナニーの習慣は全くなかつた。そこに突然身体が発情してしまい、どう発散

すればいいのかもよく分からない。

「夜凪ちやくん、顔色悪いぞ？ 大丈夫？ オレが面倒みてやろうか？」

「え……あ、う……♡」

男が景の肩に腕を回した。流石に千世子のように胸を揉む事はないが、嫌らしい手付きで肩をまさぐつてくる。

「け、結構、ですっ……ひ、あ♡」

景の鼻を、ツンとした匂いが刺す。

密着した男の身体から立ち上る性臭。ついさつきまで千世子とまぐわっていた、オスとメスの生臭い匂いが、景の頭をくらくらさせる。

「く、はつ……うあ……♡」

「ほらほら、無理しないでさ。オレと千世子を盗み見してた時からムラムラして堪んないんだろ？ あの時すげー声出てたもんなあ」

「あ、やつ……♡」

するすると男の腕が下がつていく。肩から背中、腰……と下りていって、一番下まで

到達した腕は、景のお尻を驚掴みにした。

「くつ——！？♡♡♡」

びくびくつ——と跳ねる身体。

景の背中に電流が駆け巡る。

(う、そ……イツた……。お尻掴まれて……アクメしちやつた……。)

「はーつ。はーつ。」

「夜凪ちゃん、気持ち良かつた？ 涎垂らしちやつて、エツロい顔になつてんぞ♪」  
たらりと唾液を溢す景に、男が囁く。

「なあ、夜凪ちゃんが良かつたら、もつと気持ち良くさせてやんぞ？ ほら、股開いてみ  
？ 大丈夫だつて、この席、他からは見えねーから。オレと千世子にしか恥ずかしいト  
コ見せないで済むからさ♪」

「そ、そんなの……無理い……」

ふるふる、と首を振る景だつたが——男の手で軽く膝を押されると、くたあ、と足を開いてしまう。

(な、なんでなんで……千世子ちゃんの前で、やだ……。)

右膝を押され、左膝を押されて。景の長い足は、簡単に無防備に開かれてしまった。  
はしたない大股開き。男がペろんとスカートの前をめくると、びしょ濡れのショーツ  
が露になつた。

男がショーツの中——景のマンコに指を突つ込む。ぶちゅ、と潰れた果実のような  
音。たっぷりマンコに湛えられた愛液が、指に押し退けられて溢れ出た。

「うお、めっちゃ濡れてるじゃん。夜凪ちゃんはマン汁多い体质か。ほれほれ、浅い所責めてやる♪」

「お、んつ!? ♪ ♪ か、カリカリつて ♪ ♪ 引つ搔かないでえ♪ ♪」

「ちなみに夜凪ちゃんは知らないだろーけど、千世子は奥の方が好きなのな。天井の辺り。な〜?」

「う、うるさい……♥? 別に、好きじゃない……あんたに無理やり開発されてそうなつちゃつただけ……♥?」

びく、びくつ、と痙攣する景と千世子。

二人とも、それぞれ触れられている場所は違うとも、同じ男の指で感じさせられていた。

「ほらほら夜凪ちゃん、こっち向いて。んん♪♪」

「むぐう……!? れろ、むちゅうつ ♪ ♪ んむつ ♪ ♪」

「ぶはっ。夜凪ちゃんの唇、頂き♪♪ じゃ、ほら、千世子♪」

「はあ、分かつてる……ちゅつ ♥? れるれるつ ♥? んええつ ♥? ♥? ♪?」

あつさり景のファーストキスを奪つた男は、彼女の唇を堪能するとすぐに千世子に切り替えた。そちらが満足すると、またもう片方へ。

男を介しての間接キス——だつたが、景と千世子にそんな余裕はあるはずもない。た

とえあつたとしても、美少女二人の唾液は男が根こそぎ啜つてしまつていたので、お互  
いに渡る事はなかつたが。

「よつと……お、夜凪ちやんは胸けつこうあるね♪。着痩せするタイプ？ 千世子より  
大きいんじやね？ どうなん？」

「あんつ ♪ わ、分かんないつ……」

「ふーん。じや、オレが確かめてやるよ。どつちかな♪♪」

「ふあああ……♪」

「くうつ……んん……♪？」

右手で景の胸を。左手で千世子の胸を揉みしだく男。

健康的に手のひらを押し返す景のおっぱいと、美容に気を使いキメ細かくすべらかな  
肌の千世子のおっぱい。大きい方ではないものの、年頃の少女として十分に膨らんだ二  
人の美乳を、手のひらで覆い確かめるように揉む。  
むにむにと撫でて、たぷたぷと掬い上げて、むつちりと掴んで。散々二人の乳房を堪  
能したあと、

「ん♪……ギリ、コツチかな？ はい、おめでと♪夜凪ちやん！ 千世子はもつと精進し  
ろよ♪、オレのチンポ挟めるくらいになれや♪ はい、美味そなおっぱい持つての二  
人に御褒美♪♪」

「あっ、あ——♡」

「くふうううう——♥？」

コリコリ、と乳首が指先で転がされる。限界まで敏感になつた二人は堪えられるはずもなく、乳首アクメで腰を跳ねさせた。

男が絶頂で身体を震わせる景の手を掴み、ズボンの上から自分の股間に押し当てた。千世子の手も同じようにする。

「あつ……うわ、え……!?♡」

「……ふん。相変わらず、キモい大きさ……♥？」

「千世子も夜凧ちゃんも、マジで可愛いわ。オレのチンポ、もうこんなんよ♪」

固い布のジーンズの上からでも分かる、規格外の大きさ。男のチンポはすっかり勃起して、窮屈そうに布を押し上げている。若手トップのスター、百城千世子と、新進気鋭の新人、夜凧景——ファンや業界人が注目して止まない二人の女優を両手に侍らせていいのだ。役目かと言わんばかりに臨戦態勢になるのは当然だった。

「夜凧ちゃん、しつかり触つてみ？ ズボンの上からでも大体の形、分かるつしょ？」

「す、ご……おつきくて……カタくて……♡ ちよつと、苦しそう……」

「いやもう、めっちゃ苦しいよ。早く夜凧ちゃんのマンコに入りて、つて、ガマン汁すつげー出てる♪」

「つつつ♡♡ わ、私のおまんこに……♡♡」

夢中でチンポの形をなぞる景。

その手はさつきから、同じくチンポをさする千世子の手と絡み合っている。ほんの数時間前までは胸をときめかせながら絡まっていた二人の指。それは今や、男のチンポを介して触れ合い——もう、お互の指に触れている事に気付きもしないのだつた。

(ちんぽ、すごつ♡♡ さつきの、私とエツチしたいつて事よねつ?? この人、私としたいんだ♡このちんぽで私とえつちしたいんだ♡♡)

(駄目……ぜつたい許さない……♥? 夜凧さんにこんなチンポ捩じ込んだら壊れちゃう……♥? それに夜凧さんじや、きつと上手く出来ないし♥? 私がしないと♥? 私がする♥?♥? 私がこのチンポとセックスするつ♥?♥?)

景も、千世子も。すっかり頭に霞がかかって、思考が溶けてしまつている。二人の頭にあるのは、眼下に膨らむ男のチンポだけ。

指先に触れる、もつこり逞しい感触の事しか、脳みそに伝わっていない。

いつか一緒に飲んだのと同じコーヒーフラペチーノは、手を付けられないますつかり溶けてしまつていた。

## 夜凪編2

(夜凪さん……夜凪さん……つ)

ぎゅ……と、枕を抱いて。

千世子は、悶々とした時を過ごしていた。

行き付けになつた高級ホテル、その一室。といつてもいつも男と寝る場所ではない、いくつもある部屋の中のひとつだ。空調も整備され、テレビやオーディオ、ベッドやクローゼット……宿泊するのに充分な設備が整つている。

(今びろ……どうしてんだろう)

千世子がここに滞在する時は必ずワンフロア丸々貸し切りだ。本当の寝室では、今、男と景が二人きりでいる。

ス○バで極度の興奮に押し上げられた千世子と景。尻をひつ掴まれ、男に引きずられる千世子と景は二人まとめてホテルへ連れ込まれたのだが——寝室へ呼ばれたのは景のみ。千世子は閉め出されてしまった。

それは、罰の意味合いが強いのだろう。千世子は変わらず男に楯突き、罵倒する事を止めていない。それは千世子の生来のプライドの高さ、気の強さもあつたし、心の底で

は、その反抗心を折られる事に被虐的な快感を得てているという事もあった。

特に今回はその傾向が強い。なんせ景とのデート中に呼び出して犯されていたのである。千世子としても怒りを覚えていたから毒をはきやすかつたし、その上で尻を叩かれ精液便所として使われるマゾアクメは堪らないものがあった。

だが、そのせいで千世子はおあずけを喰らつてしまつた。今回あの男のチンポでハメられるのは、景のみだ。

(つ……失敗した、失敗した……！　私が夜凪さんの代わりになれば良かつたのに。夜凪さんの代わりに、あいつに犯されれば良かつたのに……つ)

自分が身代わりになつていれば守れたかも知れないと悔やむ千世子。

しかし、それは建前だつたかも知れない。

なんせ千世子の股間はマン汁を垂れ流しにしていて、

(……そう、そうよ……♥？　私が今頃エツチ出来てたかも知れないのに♥？　あいつも酷いよ……いつつも私を便器扱いしてゐるじやない、今だつて私を選んでくれれば……♥？)

マンコを指でほじくり、枕を濡らしながら思う。

本当に景を守るためなのか、そうでないのか。親友を守る方か、あのチンポに貫かれ方か——どちらが重要なのか、もう千世子本人にも分からなくなりつつある。

(……違う、違うっ!! 思い出さなきや。夜凪さんのこと、夜凪さんが……好きだつてこと)

ぶんぶん、と首を振ると、僅かに冷静になれた。

記憶を懸命に手繰り寄せる。思わぬ出会いから始まつた、景との記憶を。

『デスアイランド』。景との切つ掛けとなつた映画は、ひどい内容だと思つた。何度か経験した、自分——百城千世子というスターの力に頼つた大した事のない映画だと。

けれど、そこで出会つた夜凪景は、千世子を追い抜くかも知れない役者だつた。そして、千世子の仮面を見抜いてくれる少女だつた。

景は知らないだろう。打ち上げのあとで『デート』に、千世子がどきどきしながら景を誘つた事を。

景の演じた、『銀河鉄道の夜』の舞台を見た。あの時に景の役作りの為にした『デート』が、千世子と景の初めてのデートらしいデートだつた。

千世子を『喰らう』事で更に一段上の女優になつた景を、千世子は素敵だと思った。そして、その姿に嫉妬さえ。

巨大な新星として発見された景。黒山に近くお前を超えるだろうと言われ、アリサには貴女の全盛期は持つてあと二年と告げられ——あれ程の対抗心を覚えたのは、それだけ景が千世子にとつて大きな存在になつていたからだ。

そして、舞台で雌雄を決した、『羅刹女』も――。

「」

千世子がスマホを操作すると、いつか撮影した動画が再生された。

夜の海岸で、よく知る人たちと一緒に景が花火をしている。笑顔を浮かべて、飛びはねながら楽しそうに。

この数分後、千世子は景を初めての『デート』に誘う。

まだ今と比べれば仲も深くなつていない頃。

それでもこんな動画を撮っていたのは、予感があつたからだ。

夜凪景はきっと、自分にとつて掛け替えのない存在になると。

「…………うん」

その全てが、千世子と景の得難い想い出だ。

彼女と築き、これからも続くだろう尊い時間と、あの男との一瞬の快樂。

それは、一体どちらの方が景と千世子にとつて大切なのだろうか。

(決まつてる。そんなの決まつてるよね、夜凪さん)

自分でも驚くぐらいあつさりと千世子は景への想いを取り戻せた。

ほんの僅か。ほんの少しだけ子宮の疼きを堪えて相手の事を思えば、簡単に自分を取り戻せる。

ならばきっと、景もそう。

千世子が一言、景に『好きだ』と言えば、きっと目を覚ましてくれる。

「——よし」

深呼吸して心を落ち着かせる。

動画に映る景の笑顔を見て拳を握つた。

（夜凪さんを助けにいこう）

千世子は決心した。問題は男がどう出るかだ。卑劣な男だ、簡単に景を解放することは思えない。暴力に頼るかも知れない。

それでも、まず行動しなければ。大切な親友のために。

（待つて夜凪さん。私が助けてあげるから）

立ち上がり、部屋を出ようとする千世子。

その時——スマホが、着信を知らせて震えた。

「っ！」

動画が一時停止し、表示された相手先の名前は——『夜凪景』。

千世子の表情がぱあっと明るくなつた。

（夜凪さん、よかつた……！）

やつぱり間違つていなかつた。

景も同じ気持ちで私に連絡してくれたんだ。

すぐさま千世子はスマホを耳に押し当てた。

「夜凧さんっ!? よかつた、大丈夫? 今どこにい

『————お、お、お、お、お、お、お、＼＼＼ツツ＼＼＼ すごいすごいすごいいつ、チン  
ポすごい／＼＼＼つ＼＼＼ もつと奥突いてつ、子宮の入り口のとこつ＼＼＼ そこにチンポ  
ぶつかると頭飛んじやうつ＼＼＼ チンポでおなか抉つてえ＼＼＼ 私のおまんこ貴方の  
チンポの形にしてえええ＼＼＼ツツ＼＼＼』

(————、あ……?)

鼓膜をつんざくような女の濁つた声に、千世子の思考が止まつた。

聞き慣れた声のはずなのに、相手が誰だか分からぬ。

スマホのスピーカーから唸り声が垂れ流される。

『イグツ＼＼＼ まらイグツ、イグイグ＼＼＼つ＼＼＼』

『夜凧ちゃん、雑魚マンすぎ＼＼＼(笑) もしかして千世子よりチヨロいんじやね? オラ  
オラつ♪』

『お、うつ＼＼＼ お、＼＼＼ お、ツツほ＼＼＼』

『ぶはつ、クールな顔が台無し（笑）間抜けなツラしやがつて、千世子とそつくりだな（笑）レズカツプル二人まとめてクソ雑魚マンコかよ、張り合いねくなこのオナホどもがよお』

「え…………あ…………」

立ち尽くす千世子。

きつと自分との記憶を思い出してくれる——と。

景がチンポに負けるはずがない、と。

そんな勝手な思い込みが、ガラガラと崩れていく。

『いや〜、夜凧ちゃんのマンコ、クソ雑魚だけど締まりはいいなあ。これでさつきまで処女だつたつて、マジかよ（笑）は〜、ホント千世子ナンパして良かつたわ〜。アイツオナホに出来たから夜凧ちゃん喰えてる訳だし』

『ち、千世子ちゃんつわ 千世子ちゃんも、こんな風に襲つてわ チンポで虐めたのつ？』

『そだよ〜？ 一月前くらいかな、町歩いてる千世子見つけてさ〜、もう顔見ただけで勃起止まんねえの。上手い具合にホテル誘つたらホイホイ着いてきてさあ、その日中にパコつちまつた（笑）』

『つ……そんな、そんなの……つ』

夜凪の声に棘が入る。

それを聞いて、千世子が僅かな希望に縋る。親友はまだ理性を失っていないくて、自分のために怒ってくれるんじやないかと。

けれど、

『そんなの——ズルい♡♡　ズルい、ズルいよ千世子ちゃん♡♡　早く教えてよ、このチ  
ンポ気持ち良いよって♡♡　デートなんかしてるより何百倍も幸せだよって♡♡　チ  
ンポ一人占めしたくて秘密にしてたのね♡♡　最低、最低♡つ♡♡♡』

『ぶはは！　だろゝ夜凪ちゃん、千世子最低だろゝ？？　あのメスブタさあ、夜凪ちゃんと  
百合百合しどきながら、裏では自分のオトコのチンポ独占してよがつてたんよ♪　ヒ  
ドいよなゝ、夜凪ちゃんも早くオレのオナホになりたかつたよな♪』

『うん、うんつ♡♡　早くこのチンポ欲しかつたあ♡♡　私もオナホにして、貴方のオナ  
ホにしつ♡♡』

『もつちろん。お前らレズカツプルまとめて銅つたるから覚悟しろや（笑）千世子と一緒に  
なら夜凪ちゃんも安心つしょ??』

『やつたあ♡♡　でもお願いつ、私が優先ね♡♡　チンポ挿れたくなつたらまず私を呼  
んで♡♡♡♡』

景の言葉に理性はなかつた。少女としての体面だとか、千世子との友情だとか、そういったものは消えていた。

きつとチンポで貫かれ、ハメ潰されているうちに、邪魔なものから削ぎ落とされていったのだろう。

そして今叫んでいることが一番最後に景に残つたものなのだろう。

『すつづごー♡ オツ♡ チンポしゅごー♡ なんで知らなかつたのかしら♡ ♡ 女優なんかしてる場合じやなかつたわあ♡ ♡』

『だろだろ？ 感謝しろよ、オレとオレのチンポに♪ 夜凪ちゃんの未使用マンコ、ちやーんと気持ち良くしてやつてんだぞ？？』

『うんつ♡ ♡ ありがとう♡ ♡ 私もう、貴方のチンポのためなら何でもしちゃうかもつ♡ ♡』

『へー？？ んじや夜凪ちゃん、オレのチンポか女優か、片方だつたらどつち取るの（笑）』  
（あ————や、だ）

千世子の背筋に、ぞわりと怖気が走る。聞きたくない。その答えを聞いてはいけない。

けれど、分かつてしまう。景がどう答えるか。  
何故なら——千世子も同じだからだ。

千世子もきっと、初めて彼に犯されてメスの悦びを教え込まれた時、こう聞かれた  
ら、同じように答えただろうから。

『チンポ♡♡ チンポです♡♡ 女優明日で辞める♡♡ ううん、今日辞める、いま辞  
めた♡♡♡』

『ぎやはははは!! マジかよコイツ、千世子カワイソ♪（笑）あ、でも辞めんなよ、女優  
の夜凧景だから勃起3割増しなんだからよ♪。映画にも舞台にも出て、もつとファン  
作つて、そんでファンよりもオレのセフレ生活優先する事、いいな♪??』

『あッ、あんツ♡♡ わ、分かつたわつ♡♡ じゃあ辞めない♡♡ 女優続けて貴方のチ  
ンポ硬くするつ♡♡♡ ひんつ♡♡♡』

——どうせ私たちはしわしわのおばあちゃんになつても役者だから。

ほんのついこの間交わした気がする言葉。

あのとき景がどんな顔をしていたか、もうよく思い出せない。

べたん、と千世子が床に膝を落とす。

景への怒りは湧いて来ない。

なぜなら、こうなつた原因は自分にあるから。あの男に誘われた時、もつと強く断つ  
ていたら。一度抱かれただけで魅了されるような女でなかつたら。今日のデートに彼  
を連れて来なかつたら。

でも、もう全てが手遅れだ。

千世子には分かる。同じく男の性奴隸に墜ちた、百城千世子には。

(ああ――― そうなんだ)

くちゅ……と音がした。

千世子の指は、いつの間にか勝手に股間へ伸びていて、また膣を搔き回している。  
(夜凪さんも……同じなんだ……♥？♥？)

景の陥落を目の当たりにして、景を庇う為という千世子の建前が崩れていく。  
もう景の為に、墜ちてはいけないと、バレてはいけないと思う意味もない。  
もう我慢しなくていいと悟った千世子の理性が消える。

(そう、だよね…… ♥？♥？ そいつのチンポ凄いもん♥？♥？ 他の事どうでもよく  
なつちゃうもん♥？♥？ そいつのオナホになるのが一番の幸せだって、子宮で分から  
されちゃうんだもん♥？♥？)

スマホからは、相変わらず景の喘ぎ声が響いている。

千世子は今まで感じたことのない興奮を覚えていた。親友を奪われ、同性の恋愛関係  
を潰され、そして自分も同じ男の性処理便器である。以前の千世子なら気がおかしく  
なっていたかも知れないが、今は違う。あの男に身体も精神も調教され切った事で、こ  
んな絶望をも快楽として受け止められるようになつていた。

(取られちやつた……取られちやつた♥?♥? 夜凧さん、あいつに寝取られちやつた♥?♥? 私と夜凧さんが積み上げてきたもの全部♥?♥? あいつのチンポに負けちやつた♥?♥?♥?)

『あん、あツ♡♡ んぎゅうつ♡♡ お♡♡ おうツ、おツ、お♡♡』

電話を通じて送られる、リアルタイムの寝取られ音声をオカズにして、千世子が狂つたようにオナニーに励む。ぶちゅぶちゅぶちゅ、と愛液を飛び散らせながらマンコを指で開き、掘り返し、引っ搔いていく。

それが、堪らなく気持ち良い。男への敗北感と景を奪われる焦燥感に身を焦がしながら惨めに自慰をするのが、頭が壊れそうなほどに興奮する。千世子はもう、二度と後戻り出来ない、負ける事が快感のマゾメスになつていた。

『おらおら!! 危ないトコだつたなあ、下手したらお前ら、一生男を知らないレズカツブルだつたかも知れねーんだからなあ(笑) いや、んな勿体ない事にならなくつて良かったなあ♪』

『んんツ、ふつ、あうつ♡♡ よ、良かつたつ♡♡ チンポの強さ知れて良かつたあ♡♡』

『夜凧ちやくん、千世子とオレのチンポ、どつちが好き?? 正直に答えてみ~??』

『ち、チンポつ♡♡ 千世子ちゃん御免なさい♡♡ でもチンポ♡♡ チンポが好き、貴方のチンポの方が好き~つ♡♡』

「おふツ……うぐお、おおおおおおお……ツツ♥？♥？♥？」

開いた両膝と額を床についてうずくまる千世子が、ガクガクと痙攣する。ぶしつ、とマンコが潮を吹いた。

もしかしたら、同性のパートナーとして生涯を共に過ごす未来もあつたかも知れない少女のチン負け宣言を聞いて、千世子が女として失格の寝取られマゾアクメを極める。千世子の脳に、精神に、深く深く敗北感が刻まれていく。

快感と結び付いて切つても切り離せない、屈服絶頂が。

千世子は快感が収まるまで、床の上で震えていた。

数分間、マン汁を漏らしながら芋虫のようにのたうち回った千世子は、しばらくしてふらふらと部屋を出ていった。



「千世子ちゃん……撮ってる？」

「う、うん。しつかり撮れてるよ」

「……そ、そつか」

千世子はカメラを構えて、ベッドの上の景を撮影していた。  
寝室に押し掛けた千世子を、意外な事に男は笑つて招いた。

あの電話は、男が掛けて千世子に聞かせたものだつたらしい。耐えきれなくなつた千  
世子が部屋に来るのもお見通しだつたという訳だ。

とはいゝ、素直に相手をして貰えるわけもなく。千世子は、男と景のまぐわいを撮影  
する仕事を任されたのだつた。

「あー、ええと……。ち、千世子ちゃん、撮影はした事あるの？」

「う、ううん。本格的にはないわ、手伝つた事くらいはあるけど」

「そ、そつかー……」

「…………」

(（…………）

景の痴態も、それを千世子が聞いてオナニーしていく事も二人は知らされている。  
なので、率直に言つてとんでもなく居心地が悪かつた。

「あ、あの、千世子ちゃん。えっとね、さつきのはその、流れで言つちやつたつていうか

ね

「い、いいのいいの。ぜんぜん氣にしてないから」

「う、うん……」

揃つて黙り込む。

そこへ、

「お待たせく。千世子、準備出来たかく？」

「う……出来るわ……♥？」

「よーし。んじや夜凧ちゃん、もつかいやろつか♪」

「そ、そうね……♡」

男が水分補給から帰ってきた。

当然のように全裸の股間では、景と千世子を駄目にしたチンポがそそり勃っている。  
景をさんざんイカせた男だつたが、未だに一度も射精してはいない。ひたすら景のマ  
ンコを慣らしていただけだ。自分は前後不覚になるまで絶頂させられたのに、と景が潤  
んだ目でチンポを見詰めた。

「んじや、早速始めますか。夜凧ちゃん、まずはチンポに挨拶♪　さつきまでアヘアヘさ  
せてやつたチンポだぞく？」

「う、うん……♡　……れるつ♡」

ベッドに腰掛けた景の隣に、男が膝立ちになる。景は首だけを傾けてチンポに唇を寄せた。

「じゅるつ……れろおつ♡ んふツ……ちゅ、ちゅ♡ くぶつ♡♡」

うつとり目蓋を伏せてチンポをしゃぶる。男が景の髪のほつれを直し、髪をかきあげて、唇がカメラに映りやすくする。

（うわああつ……♥？ 夜凪さん、あんなエツチな顔で……♥？ もうチンポの舐め方、教え込まれちゃつてるし……♥？）

千世子が覗くレンズのむこう、ほんの数十センチ先で、ずるずると景が勃起を啜る。寝取られマゾに目覚めた千世子の心臓がばくばくと鳴る。映画や舞台でよく通る声を発する、千世子がいつか口付けたいと願つていた景の唇——それが今、憎き男のチンポを扱く穴になつている。千世子の股間が、また愛液を垂らし始めた。

「ぐぽつ、ぶぽツ♡♡ ぶちゅツ♡♡ じゅずずず♡♡」

「あ～、イイね～。千世子、もつと寄せつて。夜凪ちゃんがオレのチンポしゃぶつてると、ちゃんと撮つとけ」

「わ、分かつてる……♥？」

千世子の新しい性癖は、男にも筒抜けだ。あえて千世子が屈折した快感を得るように注文を付ける。

「じゅぶぶつ ♪ ♪ づづつ ♪ ♪ れろお～ツ ♪ ぐぶ、ぐぱつ ♪ ♪」

「よし、じやあもつと奥まで呑み込んでみ？ そうそう、喉奥まで」

「ぐうぶツ……ごぶおおおツ……♪ ♪」

景が喉を開き、チンポを奥までのみ込む。と、食道まで入り込んでしまったのか、激しく噎せた。

「げほツ……げほ、ごほつ!! はあつ、はあつ!!」

「あー、まだ自分じや難しいかあ。そんじや千世子」

「つ…………♥？」

ちよいちよい、と手招きする男。

千世子は分かつてしまう。男が何をさせたいのか、はつきりと。

カメラをテーブルに置いて、

「……夜凪さん。ごめんね、ちよつと我慢して」

「え——ぐ、ぶツ!」

景の顔が男の腰にぶつかる。千世子が頭を掴み、無理やり男のチンポを呑み込ませたのだ。

奥まで含むと、頭を引き、亀頭を咥えるくらいまでチンポを抜く。そして再び奥まで。親友の頭を掴んで無理やりさせるイラマチオに、千世子も、そして景も興奮を高めてい

く。

「ぶちゅツツ♡♡ ゴおツ♡♡ ゴボツ♡♡ ぶぼツ♡♡ ずろおおおツ♡♡」

千世子とは対照的な、鳥の濡れ羽色の長い髪を振り乱し、景の口の喉がチンポを扱く道具になる。

溢れた唾液でてらてらと景の口元が光る。自然と汗も涙も盛んに分泌され——しかし景に嫌がる様子はない。苦しそうにしながらも、逞しいチンポへの奉仕に悦びを覚えているようだつた。

「元彼女に頭掴まれてフェラ穴にされてる夜凪ちゃん、カワイイ♪ オイ千世子、もつと奥まで突っ込めや」

「うう……♥？♥？」

一瞬ためらうものの——横目に見る景と目が合う。その目が淫蕩に細められるのを見て、千世子がぐいっと景の顔を押した。ぐぶり、とチンポが侵入する。喉奥に当たつたチンポを、景は今度は吐き出せない。千世子に顔を押し付けられているからだ。

生理的な反射で景が頭を引こうとする。それでも千世子が無理やり止めていると、ビクッ！ ビクッ！ と景の肩が跳ねた。

息苦しさ、イラマチオの興奮、それに喉を押し開くチンポの逞しさ。力ずくでそれら

をまとめて味わわされた景は、白目をむいて絶頂した。ぶるぶると震えながら痙攣する。マンコから本気汁の塊がごぼりと溢れ、シーツに濃い染みが広がった。

景の窒息アクメを確認して、ずるう、とチンポが引き抜かれる。チンポに景の唾液がどろどろに絡み、威圧的に黒光りしていた。

「お、え、ツ……げほつ　ごほつ　はあつ、はあ一つ　」

「よ、夜凪さん、ごめんね……大丈夫……？」

「はつ、はあつ！　だ、だいじょうぶ、千世子ちゃん……」

心配する千世子だつたが、景の目はとろんと溶けて、むしろ快楽を感じているようだつた。

「どーだつた夜凪ちゃん、オレのチンポ。マンコに挿れてるだけじゃ分かんなかった形、覚えた？？」

「うつ、うん……　迫力すごいわね……　腰抜けちゃつた……」

「だろ？？」

景がうつとりとチンポを見詰める。

（またイカされちゃつたわ……　しかも今度は喉に突つ込まれただけなのに……　それでもまだ射精してないなんて　私、彼が一度も射精しない間に何度もイカされたんだろう……　）

ひたすら一方的にアクメさせられるばかりで、男は一度も絶頂を迎えていないのだ。男に対する畏敬と、申し訳なささえ感じてしまう。

それでも、ようやく男にも限界が来ていた。まとわりついた景の唾液を垂らしながら、チンポが射精を求めて跳ね回る。

「あ〜、ヤツベ、流石に出そう。ほらほら夜凧ちゃん、股開いて！ 夜凧ちゃんのマンコ使わせてよ」

「つ……わ、分かつたつ……♡♡」

ベッドに腰掛ける景が、そのまま身体を倒す。

はしたなく脚を広げて、がに股になった。千世子の構えるカメラが、おしつこを漏らしたような濡れ具合のマンコを捉えた。

ぎし、と男が景に覆い被さる。チンポを真上から、マンコに杭打ちするように。

(夜凧、さんが……喰われる♥？♥？)

まるでか弱い小動物を肉食獣が捕食しようとしているかのように、千世子には映つた。

止めるべきだろう。本来の、景の親友であり相思相愛である千世子の立場なら、でも、止める気には到底ならない。

むしろ、あのチンポにザーメンをコキ捨てられる景の姿を目にしたいとさえ思つてい

る。

「夜凪ちゃん、いくぜ？　あ、今回はもう、挿れたらソツコーセンスすっから、そのつも  
りで（笑）」

「つ、あ。　そんなん、入り口、ちゅつちゅつて、お、♡♡」

亀頭が膣口を浅く掬う。さんざん掘り返され、男のチンポ専用となつたマンコは、そ  
れだけでくぱくぱくとチンポを咥え込もうとする。愛液の多い体质である景のマンコか  
らとろとろとマン汁が溢れ出す。

景の顔の両脇に手をついた男が腰を微調整し、狙いを定める。  
ぐぐ、と筋肉質の身体に力が籠る。

（――）

ふと、千世子の頭に、今が最後のチャンスかもしないとよぎる。

さつき電話が掛かつてくる前。景の目を覚ますためにしようと思った、景への告白。

「夜凪さん——好き、好きだよ」

「え……千世子ちゃん？」

小さな呟きは、しつかり景の耳に届いていたらしい。

景は嬉しそうに微笑んで、

「うん——。私も千世子ちゃんのこと、ずっと前から好ツツほおおおおお〜ツツ！？」

♡ ♡ ♡ おあああ、イクツ♡♡ イグイグイグ～～つ♡♡♡」

ぶちゅ♡♡ づぶつちゅうううううう～～♡♡ ぐぶつ♡♡♡

二人の少女の甘い雰囲気を蹴散らすように、チンポが叩き込まれた。ほんの一瞬。膣口を潜り抜けた亀頭が、景の子宮口を殴つただけで、千世子への想いを紡ごうとしていた唇は、オスにハメられる快楽を叫ぶだけのものになつた。

「おふツ♡ おツ♡ おおあ～～ツツ♡♡ チンポやばあつ♡♡ 射精する気のチンポ

♡♡ さつきと全然違うつ♡♡ ひいツ♡♡ あつ来るつ、カリ広がつてゐるつ♡♡ 千世子ちゃん♡♡ 助けて千世子ちゃんつ、怖い怖いつ♡♡ 壊されちゃうつ♡♡ 全部

壊されちや、つう、お、!?」

――びゆるるるるるつ♡♡ どぶ、ぶびゅうう～～つ♡♡ びゆぱつ♡♡ びゆ  
くつ♡♡ びゅうううううううつ♡♡♡

「――♡♡♡

(あ…………終わった)

千世子が、自分も精神的な寝取られアクメを感じながら、呆然といま告白を交わしたばかりの親友を見る。

景はもはや言葉らしい言葉を発していなかつた。悲鳴のような鳴き声を上げて、人生

初の中出しアクメでイキ狂っている。

「はくくい、夜凧ちゃんの処女と初中出し、頂きくくく（笑）あくく気持ちえくくふふ  
腹ん中パンパンになるまで出しちゃるからな♪ 千世子♪、ちゃんと夜凧ちゃんのマ  
ンコにオレのザーメンが入つてくるの、接写しとけやくく（笑）」

「オ、…………ツ、お、お、お、＼＼＼ツツ……♡♡♡」

腕を男の首に、脚を胴体に絡めて身体を揺すり、少しでも多くのザーメンを恵んで貰  
おうと浅ましくすがり付く景。

（私たち……負けちやつたんだあ…………♥？♥？♥？）

ヘコヘコと腰を振るその痴態を録画しながら、千世子も悟る。  
自分も景も、勝てなかつた。

二人で培ってきた、想いも、積み重ねも――。

二人の股にはついていない、あの逞しいチンポに、完全敗北したのだと。

同時に押し寄せる絶望と絶頂で酩酊しながら、千世子はパコられる親友を撮影し続け  
た。



「ふツ、ふーツ……。 れろ、れるつ。」

「んべええ～～つ。 ベろお～つ。」

数時間が経つて、ようやく男と景のセックスは終わっていた。

景は股間のみならず、髪から顔面から胸まで精液まみれだ。中出しを存分に堪能した男が、景にマーキングするために気の向く所へぶつかけたのだ。

「んく、いい眺め。 トップ女優二人に舐めて貰えるたあ、男冥利に尽きるね～♪」

「もう、ちゅ～つ。」

「は、はつ。 ペろつ。」

男の身体を二人の舌が這う。

景と千世子は、ベッドに腰を下ろし脚を放り出した男の足元にいた。

千世子が左足、景が右足。それぞれ、男の脚を夢中で舐めている。景は脚を抱き締めるように。千世子は犬のように這いつくばつて。

その手——千世子の左手と、景の右手は、しつかりと握られている。

ひとしきり、足全体——太ももから爪先まで——を舐め終わって、二人が口を離す。

これは、白旗を振るポーズのようなものだつた。負けましたと、もう逆らいませんと

行動で示しているようなものだ。

そして、それだけでは足りなかつた。

景と千世子。墮ちきつた二人が求めるのは、もつと他にある。

優先順位の一番上に立つた、この男のチンポ。

二番目になつてしまつたけれど、変わらず大切な、壊れかけた親友との仲。

求めるその両方を保つには、選択は一つしかない。

手を握り合いながら二人が三つ指をつく。

揃つて床に額が触れるまで、深々と頭を下げる。

「お願ひします……♡♡ 私たち一人とも……♡♡」

「貴方の、貴方だけの性処理便器にしてください♥？♥？」

渾身の申し入れに、黙つて男は二人の頭に足を乗せた。ぐりぐりと踏みつけて弄ぶようく体重を掛ける。

何も言わずともそれが答えのようなものだ。

景と千世子は嬉しさの余り、土下座のままアクメしていた。

今朝のデートと同じように、手を繋ぎながら。

## 羅刹女編 1

—— それでは、大きな話題となつた舞台『羅刹女』に移りますが……お二人は親友同士でありながら、競い合う関係でもあつたようですね。

『そ、そんな！ 私はまだまだ駆け出しで、千世子ちゃんには見習うことばっかりで……確かにあの舞台ではそういう感じになつちやいましたけど、私なんか全然』

『夜凪さん、謙遜し過ぎると嫌味だよ？ ていうかケンカ売つてる？』

『千世子ちゃあん！』

『冗談だつて。ふふ、そうなんです。私たち良き親友でライバルなの、ね？』

『うつ……う、うん……♡』

—— 成る程。しかし先ほどからもそうですが、百城さんのそういうた、良い意味で気安い雰囲気はなかなか珍しいかと思います。何か心境の変化でも？ 『くすつ……何だと思いますか？ 見当が付いてるんですよね？』

『んんつ？ どういうこと？』

『はいはい、鈍い所も可愛いね～夜凪さんは、なでなでしてあげるから静かにしてて？』  
『うひやあ♡』

——そ、そうですね。では言つてしまいますが……ネットを中心に、そちらの夜凪景さんと親密な仲になつたからではないか……と。そういうつた声が多く聞かれています。それについては……

『し、親密!? 私と千世子ちゃんが!? うふ、うふふ!! いや、やつぱり分かつちやむぐぐぐ』

『はい黙つてねー。ええ、羅刹女の舞台を切つ掛けにファンの方がそういうつた方向で盛り上がりつてらつしやるのは把握しています。当初は舞台の写真について話題になつてましたけど、だんだん絵心のある方がイラストを描いてくれたりなんかして』

『あつ、見た見た! 私と千世子ちゃんがデートしてる所の絵だよね。すつごい数のいいねが付いててびっくりしちゃつたわ! ああいうの、百合つて言うのよね! でもあれは想像で描いてくれたんだろうけど、私たち本当に何回かデートしたこともあるの! この前行つた新宿デート、楽しかつたな!』

『夜凪さんそろそろ黙ろうか?』

——それは驚きです。お二人はプライベートで出掛けられる関係なのですね。

話せる範囲で構わないでの、具体的にどのようなデートをされたのでしょうか?

『どのような、つていうと。スタバでお茶したり、ゲームセンターで遊んだり』

『うん、そのくらいよね夜凪さん』

『あとそうだ、ポツキーゲームしてみたり!』

『うん、そのくらいにして夜凧さん』

『ドキドキしたけど楽しかったー。でも千世子ちゃんはくつついてないって言うけど、私は絶対唇がくつついたと思うのよね。だつてちょっとブニツてしたもの。千世子ちゃんの顔、真っ赤になつてたしむぐぐぐ』

『……ええと、はい。まあ、こんな風に振り回されています』

——あ、あはは。仲睦まじくて素敵ですね、今のお話はファンも喜んだことで  
しよう——

大きなテレビが、インタビュー番組を垂れ流している。

インタビュアーに合わせて、隣同士に座つた千世子と景が質問に答える姿が映されて  
いた。以前放送されたものの再放送だ。意外と茶目っ氣のある白髪の天使と、天然ながら演技を見れば誰でも一瞬で分かる才能の持ち主である黒髪の新鋭女優。これで二人の関係性の人気は爆発し、『よなちよ』なる愛称が出来たのは記憶に新しい。特に景が溢したポツキーゲームの話の影響は大きく、数多くの創作物が量産された。

「おお、本当だ。スゲーたくさんイラスト描かれてんじやんお前ら。うわ、『よなちよ

ポツキーゲーム』なんてタグあるし。十や二十じやきかねー数だなコレ』

ベッドでスマホをいじる、柄の悪い男が言つた。端末の画面には、顔を赤らめた二人の美少女がポツキーの両端を咥え、少しづつ頬張つていく連作イラストが表示された。一口近づくにつれ千世子と景の表情が恥ずかしげになつていて、ほんの僅かに触れてぱつと離れた二人の顔は真っ赤になつていい——というもの。好評を示すマークには、実に十万を超える数が押されている。

「はー、やべえ人気だわ。けどまあ、ファンの諸君には悪いな。こいつらが咥えてんのはポツキーじゃなくて」

男が、眼下に持つていたスマホをどかす。

そこには、

「ぶちゅちゅちゅつつ♥？♥？　ずびいつ♥？♥？　じゅずず♥？♥？」

「れろおんつ♡♡　れるうくくつ♡♡」

——イラストと同じような構図で、チンポの幹に左右から口付けていた、二人の姿があつた。

二人は自分たちが映つているテレビなど目に入らないらしく、四つん這いで夢中でチンポに舌を張り付かせている。千世子は唇を竿に密着させて啜り、景は舌で舐め上げていく。チンポは先っぽから根本まで二人の唾液でべとべとになつっていた。

百城千世子と夜凪景——二人は毎日のように男と交わっていた。両方ともが揃わないことはあつても、どちらとも会わない日はほとんどない程だ。ファンからは天使と呼ばれ憧れの眼差しを受けるスターと売り出し中の新星女優——ファンの間では百合百合しいうわさがまことしやかに流れる二人は、この男の専用肉便器であつた。彼らの呼び出しがあれば仕事を押してでも会いに行つてその瑞々しい肢体を自由にさせ、撮影の休憩時間には現場を抜け出して物陰でフェラ抜き奉仕。以前は小遣いを渡す程度だつた貢ぎ物はそれぞれの口座直通のカードを渡される程になつており、売れつ子女優二人の収入を使い込み放題だつた。

オンの時でさえそうなのだから休みなど一日中繋がつているのが常である。今日も朝からホテルに呼びつけた男のチンポを一人で取り合つようにしてやぶつていた。

「うつわ、これケツ丸出しじゃん。また大胆にぶつ壊したなあ、千世子」

「う、うるさいつ。この方があんたの無節操チンポには効くでしょつ♥？」

ぴら、と布地をめくつて尻を見られ赤くなる千世子。

今日の二人の衣装は、いつもと一風変わつていた。それは、まだ話題も新しい、景と千世子がダブルキヤスト舞台で競い合つた『羅刹女』の衣装だつた。景は黒と赤、千世子は白と青を基調にした中華風の衣装。もちろんメイクや髪型もしつかり舞台と同じに決めている。

しかし、服には手が加えられていた。端的に言えば——より厭らしく、淫靡で破廉恥になつてゐる。

千世子の服は袖と裾がざつくりと切り落とされ、肩口や太ももが露出している。元々の舞台衣装にあつた、羅刹女としての矜持を感じさせる風格はどこかへ消え、風俗店のミニスカチャイナのコスプレ衣装のようになつてしまつていて。特に裾に関しては限界まで切り詰められ、桃尻がちらちらと垣間見えてしまつてゐる。

景の服も同様、いやそれ以上だつたかも知れない。襟を容赦なく切り開き、肩どころか二の腕の辺りまでずり下がつていた。着やせするたちの景の豊かな胸部、その北半球がむつちりと顔を覗かせている。こちらは裾を短くするどころか、下半身の袴を着てさえいられない。本来なら袴の上に付けられる布製の前垂れだけで股間を隠している。ペロリとめくれば、それだけでマンコが丸見えになつてしまふだろう。

完全に男の気を煽り、セックスに誘うためだけの衣装。これはこの為に新しく見縫つたとか、予備のものを押借したというわけではない。本番の舞台で着ていた衣装そのものだ。

舞台衣装は使い捨てではなく、保存しておいて再びその劇を上映する際や他の舞台に活用したりする。本来なら役者本人であろうとも衣装の持ち出しなどできないし、手を加えるなどもつてのほか。だというのに二人はかなり無理を言つて自分の担当した役

柄の衣装を譲り受けっていた。頼まれたスタッフは、二人揃つて頭を下げる千世子と景を見て、仲の良い親友同士が成功した舞台の想い出に欲しがつたと思つただろう。けれど実際は二度と表舞台では使えないだろう形に切り刻まれ、男のチンポ煽り用ドレスとして使われているのだつた。

「いいねえ、録画しとくか。おら千世子、ちゃんとこつち見ろつて  
「んむうつ……♥？」

男がスマホを切り替えて動画を撮る。朱色の口紅がべつとりとチンポに塗りたくら  
れているのがアップで映し出された。

「あはは、千世子ちゃん顔真っ赤！。ていうか、内もとに何か伝つてないかしら？」

「あ、あのねえ夜凪さん。貴女だつて乳首立つてるの見えちゃつてるわよつ」

『元』百合カツプルの二人が、チンポの左右で仲良く笑う。

千世子と景がこんな格好をしているのは、『羅刹女』の舞台の映像を見た男が求めたからだ。気高く刺々しさのある羅刹女はいたく男の気に召したらしい。『羅刹女』に扮した二人を犯したい、とのたまう男に、千世子と景は一も二もなく了承した。もう二人にべく数多く挿れて貰えるかどうか。男に命令され、その方がチンポが硬くなるというのなら断る理由はなかつたし、あの舞台の想い出を身に付けてハメ潰される想像を描くだ

けで、千世子と景のマンコはぐつしょりと濡れるのだつた。

「ふふつ♡ こんな近くで千世子ちゃんと見詰め合つてるとドキドキするわね♡」

「うん……♥？ 夜凪さんの目、大きいね。吸い込まれそう……♥？」

恋人繫ぎでチンポを挟んでキスを交わす。甘つたるく唇を食み、舌を絡めるキスをチンポに浴びせていく。

「れる、むちゅ♡ んぷつ♡」

「はふ……♥？ ちゅつ♥？ ぷちゅ♥？」

キスフェラ奉仕を受けている男が、御褒美というかのように二人の首もとをくすぐる。それぞれの耳飾りや髪飾りがちりちりと鳴つた。景は触れて貰つて嬉しそうに、千世子は眉根を寄せて反応する。すっかり骨抜きの二人だが、それぞれのスタンスは対照的だつた。景は完全に調教された犬のように従順に男にすり寄る、男に与えられた快樂をそのまま受け取つて酔いしれるタイプ。一方千世子は素直に傳くのではなくて、あえて反抗的な態度を取つてへし折られることで屈折した快感を覚えるタイプだ。美少女カツプルの反応の違いは、互いを引き立たせて男を飽きさせなかつた。

——男が写真モードにすると、景がカメラ目線で『ぴすぴす♡』とポーズを取る。その唇は幹へのキスを止め、亀頭をすっぽり咥えていた。舌をはみ出させ唇を思い切り伸ばしながらの両手ピースがパシヤパシヤと撮られていく。羅刹女のスタイルで

ひよつとこWピースフェラをやるものだから、その下品さは凄まじい。怜悧な目元の限りメイクも、手の込んだ髪型も崩すことなく、ただ口元だけをチンポ扱き穴として吸い付かせる。もごもごと動く口の中では舌が亀頭を磨いているのだろう、溢れた唾液が頬へ伝つた。次第に鼻息が荒くなつていく。寄り目でチンポを見詰めながら、唇をカリのくびれに引っ掛け、おとがいを反らせてチンポを傾ける。んぽ、と景が口を開くと、唾液を散らしながら勢い良く千世子の鼻つ面にチンポがぶち当たつた。びちゃあ、と唾液と先走りが千世子の顔を汚す。一世を風靡する女優である自分が、親友のフェラで反り返つた勃起チンポで顔面を殴打される——そのひどい屈辱だけで千世子は甘イキしてしまう。懸命につり上げていた目尻はくたりと垂れ下がつて、目の前にそびえる自分と景の恋愛関係を喰い荒らしたチンポをメスの顔で見詰めた。すりすり♥?と頬擦りするときめ細かく吸い付く肌の感触に勃起が跳ねる。カメラで撮影されるのを嫌がつたのか、目線を手のひらで遮つた千世子が、新たに滲む先走りに惹かれるようにチンポを咥えた。ぬぶ、と口内に隠れた亀頭はどんどん奥へ沈んでいく。男のチンポは千世子の小さな顔など軽く縦断できるくらいの長さがあつたというのに、半分を過ぎても千世子のスロートは終わらない。深く深くチンポを納めていき、やがて奥まで達した亀頭に喉を押され、反射的にえづく。こみ上げる嘔吐感に肩を跳ねさせながら千世子は遂に限界までチンポを飲み込んでしまつた。唇がチンポの根本、腰にまで密着する。生理的には

吐き出した方が楽になるのに、千世子は自分からぐりぐりと腰に口を押し当てた。柔らかい喉奥に包まれた亀頭がびくんびくんと震え、千世子の喉を内側から膨らませる。噎せたのか、ぶぴつ、と千世子の可愛らしい鼻孔が鼻水を吹き出す——景が不意打ちで千世子の顔を隠す手のひらを掴み上げると、喉奥フェラ真っ最中の顔が晒されてしまつた。ばつちり羅刹女メイクを決めておきながら小鼻を膨らませ鼻水を吹き出し瞳を上向かせた様子は、みつともないフェラ豚顔としか言い様がない。驚いた千世子がチンポを吐き出そうとするが、男に押さえ付けられ顔を上げられない。食道までチンポを捩じ込まれ、ごぼごぼと蠕動するような奇怪な音が響く。動かせない頭の代わりかのように尻が高く持ち上がり、がくがくと痙攣した。ショーツのないせいで、ミニスカチャイナには愛液でべとべとに染みが出来てしまふ。存分にチンポで窒息させてから男が手を離すと、千世子が一息にチンポを吐き出した。げほげほと咳き込む千世子をよそに、レズカップル二人の唾液に浸つたチンポは更に大きさを増していく。その幹からは二人ぶんの口紅の跡が消え、根本にだけ輪つか状の朱色が残つていて、それはチンポが丸々千世子の口に納まつたことを表していた。

「うわっうわっ♡ 千世子ちゃんのお口のなかでもつと大きくなつた♡ 女優さんの喉を思いつきり犯して……しかもあの千世子ちゃんの大切な喉なのに♡ 千世子ちゃんの唇が魅力的っていうファンもたくさんいるんだよ？ 声だつて、最近じやナ

レーションでお仕事に出ることだつてよくあるのに……千世子ちゃんの喉をお金出してお仕事に使つてゐるのに、そんな風にオナホ扱いしちやつて……♡♡」  
景はそう言うが、彼女自身、その美貌にファンが付き始めていることを自覚している。『羅刹女』の舞台ではある意味千世子以上のインパクトがあつたくらいで、特にチンポカリ引つ掛け用に使われた唇は、舞台では紅い口紅も相まつて観客に鮮烈な印象を与えていた。

「げほつ、けほつ。ああもう最悪つ、戻しちやうかと思つたじやない」

「んなこと言つて、ケツ振りまくつてたぞー? チンポで苦しくて感じるなんて、ドマゾだなー千世子は」

「う、うるさいわねつ ♡? ♡?」

反発しながらも、千世子の瞳は潤んでチンポを見詰めていた。その手はいつの間にか股間へ伸びてくちくちと膣口を弄つてゐる。幾度となく自分のマンコを貫き、天国へ上らせた勃起。今では何より優先すべきモノになつたそれをオカズにして、すぐにマンコを征服して貰えるよう、あらかじめ自分の手で前戯を始めていく。それは景も同じで、唯一股間を隠している前垂れの下に手を差し込み、千世子よりも激しくぐちやぐぢやと掘り返していた。

「んで、どっちから先にやるよ? オレはどうでもいいけど」

「あ、私が——」

先、という二人の声がハモつた。きよとんと目を合わせた千世子と景がややあってくすくすと笑う。

「ごめんなさいつ。えつと、どうしようかしら」

「そうだね、じやんけんで決めちやおつか?」

そうだね、とマンコを弄つていない方の手で、二人がじやんけんを始める。

相変わらずテレビでは千世子と景がどれだけ仲がいいか、ファンからカツプリング的な人気があるか——なんて特集が垂れ流されている中、どちらが先にセックスするかを決めていく。

それは負けた方が犯される、というものではなくて、勝つた方が先に抱いて貰えるという勝負だった。